

箕輪遺跡

調査第Ⅰ集

— 小清水・大清水 —

昭和 55 年

箕輪町教育委員会

箕輪遺跡

調査第Ⅰ集

—小清水・大清水—

昭和55年

箕輪町教育委員会

序文

国道バイパス工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘のための確認調査の報告書である。

箕輪遺跡については、巻末の資料の紹介にも記されているが、古くより多くの人がここに関心を持ち、保存・出土品の保管・記録等続けてきた。

今回は、確認調査のため、広大な箕輪遺跡の全貌は勿論、工事予定のバイパス道路の全面の総てを知ることはできないが、埋蔵されている遺跡の重要さを知る貴重な手掛りとなった。

柴学芸員を中心として、夏休みの作業に積極的に参加する高校・大学生及び地元の作業員の方々の協力を得て、綿密に進められた。

本報告書作成に当り関係各位に厚く御礼を申上げます。

箕輪町教育長 橋口彦雄

凡 例

1. この調査は、箕輪町木下地籍の国道バイパス工事及び都市下水路工事に伴うものであるため事業着工前に調査を完了する必要上緊急の記録保存事業とした。
2. 報告書は、図版を主体とし、文章記述は、簡略とした。
3. 遺物・遺構の縮尺は、それぞれの図にスケールを入れ示してある。
4. 本報告書の執筆者及び図版製作者は、次のとおりである。

| | | | |
|--------|----------|---------|------|
| ○本文執筆者 | 林 茂樹 | 柴登巳夫 | 竹入洋子 |
| ○図版製作者 | 土器 石器の実測 | 遺構実測図製作 | |
| | 五味純一 | 柴登巳夫 | |
| | 竹入洋子 | | |
| ○写真撮影 | 柴登巳夫 | | |
5. 本報告書の編集は主として箕輪町教育委員会があたった。

目 次

序 文

凡 例

目 次

挿図目次

図版目次

| | |
|----------------------------|-------|
| 第Ⅰ章 遺跡の立地 | 5 |
| 第1節 位 置 | 5 |
| 第2節 自然環境 | 6 |
| 第3節 歴史的環境 | 7 |
| 第Ⅱ章 小清水第I 地点の遺構確認調査 | 9 |
| 第1節 発掘調査経過 | 9 |
| 第2節 遺 構 | 11 |
| 1. 発掘区地層状況 | 11 |
| 2. 木構出土状況 | 12 |
| 3. 遺 物 | 13 |
| (1)木製品 | 13 |
| 第Ⅲ章 大清水第I 地点発掘調査 | 15 |
| 第1節 調査の経過 | 15 |
| (1) 発掘調査に至るまで | 15 |
| (2) 発掘調査の経過 | 15~16 |
| (3) 第I 調査区層序 | 17 |
| 第2節 遺 物 | 17 |
| (1) 出土土器 | 17 |
| (2) 出土木器 | 17 |
| (3) 有機質遺物 | 17 |
| 第Ⅳ章 所 見 | 19~20 |
| 〔付録〕 笹輪遺跡中間報告集 | 33~48 |
| 付録解説 | 33 |
| 1. 序 文 | |
| (1) 笹輪遺跡の中間報告によせて (藤澤宗平) | |
| (2) 序 (文化財保護調査会長 那須重徳) | |
| (3) 序 (笹輪史研究会長 有賀京一) | |
| 2. 笹輪遺跡を観て考う (佐久史談会長 岩崎長思) | |
| 3. 笹輪遺跡の今後について (藤澤宗平) | |
| 4. 笹輪遺跡の内容について (小池修兵) | |
| 5. 木構所在図、木構調査表 | 49~50 |

挿図目次（確認調査）

| | |
|-----------------------|----|
| 第1図 位置図..... | 5 |
| 第2図 遺跡周辺の地形..... | 6 |
| 第3図 周辺遺跡分布図..... | 8 |
| 第4図 発掘区地層状況..... | 11 |
| 第5図 木柵出土付近の地層断面図..... | 12 |
| 第6図 木柵出土状況..... | 13 |
| 第7図 出土木柵実測図..... | 14 |

挿図目次（大清水地籍調査）

| | |
|-------------------|----|
| 第8図 発掘区域図..... | 15 |
| 第9図 第1調査区署序図..... | 16 |
| 第10図 出土陶器実測図..... | 18 |
| 第11図 出土木器実測図..... | 18 |
| 第12図 木柵出土地帯図..... | 49 |

図版目次

| |
|----------------------|
| 第1図版 小清水第I地点調査地近影 |
| 第2図版 木柵出土状況 |
| 第3図版 木柵列状況 |
| 第4図版 調査風景 |
| 第5図版 遺物出土状況 |
| 第6図版 調査風景、記念撮影 |
| 第7図版 大清水地籍調査地遠望と調査状況 |
| 第8図版 調査風景 |
| 第9図版 調査地地層状況と遺物出土状況 |

表目次

| | |
|----------------|----|
| 第1表 木柵調査表..... | 50 |
|----------------|----|

第Ⅰ章 遺跡の立地

第1節 位置

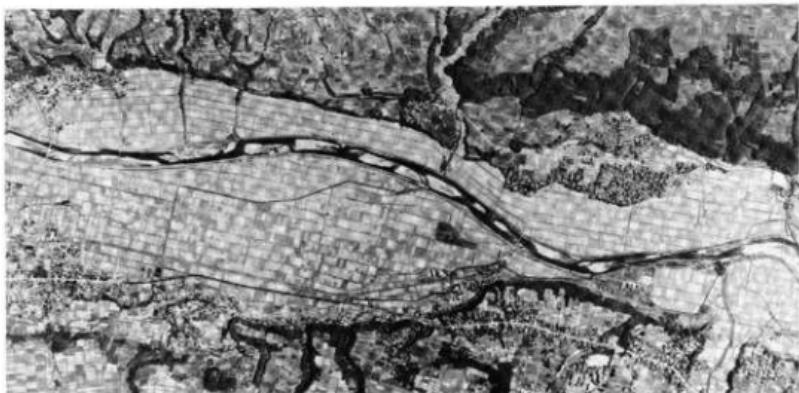
箕輪遺跡は長野県上伊那郡箕輪町及び南箕輪村にまたがり、天竜川右岸沖積地に位置する大遺跡である。飯田線木下駅から北殿駅間で東側に見える水田地帯はほとんど遺跡地と見てよい。口に箕輪遺跡と言われる広い範囲内は、それぞれ小字に分かれている。馬場、苦谷、城安寺、御室田、大清水、小清水、穴田、浜田、曾根田、久保下等がそれであり、遺跡の規模は80ヘクタールとも、100余ヘクタールともいわれる広範囲なものである。（第1図）



第1図 位置図

第2節 自然環境

箕輪町は上伊那郡の北部に位置し、南流する天竜川によって二分され、竜西、竜東の二地区に分けて呼ばれている。竜西地区は木曽山脈北部の経ヶ岳山塊に属する黒沢山(2126m)、烏帽子、桑沢山(1538m)に続く山地帯と、その山麓に形成された雄大な扇状地とそれに続く河岸段丘を経て天竜川に達している。竜東のそれは、天竜川にすぐ引き続いて河岸段丘が形成され、山麓に位置する小規模な扇状地が並び、一気に伊那山脈の前山の高原から、高雄山(1205m)、三ツ峰(1391m)に連なっている。箕輪町の地形においての大きな特徴は扇状地と河岸段丘に見られる。竜西地域を形成する扇状地は東流する小河川によってできたものであり、それ等の川は北から、北の沢川、桑沢川、帶無川、大泉川と続いている。これ等の河川によって形成された扇状地は南北に行くほど雄大である。対比する竜東地区は氾濫原に接する段丘面から上位段丘の規模は小さく、変化の多い小規模な扇状地がすぐ山地帯に続いている。又、山が急で河川の流れが早いため「天井川」のような特徴ある地形も見える。扇状地は小河川、湧水などによって順次浸蝕され、その度合は下流(西方)に行くほど進んでいる。残された面はロームに覆われ、多くは畑地、及び村落のある台地となっている。以上が東西の段丘面までの地形概略である。東西の段丘間を南流する天竜川により低位段丘(沖積段丘)が形成されている。天竜川は東西より流れ込む小河川により、そのたびに押されて蛇行している。現在は流路は一定しており、氾濫などはごく少ないが、往古より一帯の沖積面は何度となく水に洗われたと考えられる。それを物語るように遺跡地一帯は、帶無川、大泉川、天竜川の氾濫の繰り返しによる何層もの砂礫が堆積している。遺跡内には清水が湧出し、昭和26年の土地改良以前はほとんどが溝田であり、深い耕土を有していた。この耕土の下に葦の層が広く分布しており、一帯に葦が群生していた時期があったことを伺うことができる。この深い耕土を有する湿地帯に注目した古代人はここに稲作を取り入れ、一大経済地域を形成したと考えるのである。(第1図及第2図)



第2図 遺跡周辺の地形

第3節 歴史的環境

箕輪町は、天竜川をはさんで典型的な河岸段丘が形成され、台地と扇状地とが独特的の地形を作りだし、絶好の居住性をもつ一帯は遺跡分布の濃厚な所である。町内には先史より近世に至るまでの歴史上の遺跡に富み、その総数は180ヶ所を越し、上伊那郡内でも屈指の遺跡地帯といわれている。町内の遺跡を立地する条件により分類すると次の4つに分けることができる。

- 第1群 終ヶ岳山塊の山麓附近に立地する遺跡群。
- 第2群 天竜川西岸の段丘上に列状に並ぶ遺跡群。
- 第3群 天竜川東岸の段丘上及び扇状地に立地する遺跡群。
- 第4群 低位段丘（沖積段丘）の遺跡群。

箕輪遺跡は第4群を代表する遺跡であることは当然のことであるが、箕輪遺跡と呼ばれている範囲はきわめて広く、一口に100ヘクタールとも130ヘクタール以上になるともいわれている。北は帝無川附近から南は南箕輪村久保下にまで広がり、その内には、大清水、小清水、苦谷、馬場、御室田、鐵治屋垣外、城安寺、穴田、渋田、曾根田、久保下、等の多くの小字に分かれている。この大遺跡が世に注目されるに至ったのは昭和26年から施行された土地改良事業によって、当該地籍から弥生・土師・須恵・灰釉陶器、中世陶器が出土し、なかでも注目されたものは、田舟、田下転、人形、木製農耕具、木器類、更に總延長4,000m余、数量にして数万本に達するといわれた木柵、これが木製出土物である故、一段と期待されるところとなつたのである。又、弥生時代から中世にかけてと予想される水田址の存在、木製人形、木串などの出土遺物に関する祭祀的遺構の有無などが今後の調査研究に期待されるところである。

さて箕輪遺跡周辺に目をやると、第2群に示した段丘上の遺跡群を見ることができる。この中においては、上伊那郡唯一の前方後円墳の松島王墓が代表的である。この巨大な古墳を築くことのできた経済力は何であったか。それを箕輪遺跡内の米の生産に結び付けることはできないものであろうか。王墓築造の問題を考える時、この結び付きを無視することはできないと思う。昭和47年に緊急発掘調査された北城遺跡（弥生・平安集落址）、この遺跡も箕輪遺跡を望む段丘上にあり深い関係が予想される。現在までに調査された段階では、沖積面には住居址の存在がはっきりとは確認されていない。そうした時に考えられることは、西側段丘上にベルト状に並ぶ遺跡群の存在である。これ等の遺跡群との関係に深い関心がもたれるところである。これは南箕輪村に至っても同様に考えられることで、昭和42年土地改良事業に伴う緊急発掘調査された天伯遺跡はその出土遺物においても、真東に広がる箕輪遺跡との関連を無視することはできないと予想される。又、竜東の段丘においても、点在する古墳、遺跡も多く、特に中世における三日町の存在、福与城、田中城とのかかわり、等、皆、箕輪遺跡の範囲に含まれる所であり、箕輪の古代、中世にかかる本遺跡の存在の重要性を物語っている。今後継続した調査の予測される遺跡であるため、最大の関心を持って見守り、又、研究していくなければならない。



第3図 周辺遺跡分布図

- 原森煙城山道壇路前
石廬東北本大羽場の保
原森二号古煙城出壇境數
小田中中羽直日久
金原壇森山地壇口平
大田南中羽直日久
津 津 樹古壇
上島お猿羅堂羽場の森三号古
寺 古 坡 古
榎田下山林壇下森壇
心 射 の 平
宍夷渡御上王十中上
● ⑤ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓

第Ⅱ章 小清水第Ⅰ地点の遺構確認調査

第1節 発掘調査経過

本地区は天竜川面の沖積地に所在し、木下、小清水、穴田にかかる水田地帯である。昭和27年より行なわれた土地改良事業により区画が整然としている。本地区一帯が一大遺跡地帯として注目されるようになったのはこの地域に土地改良事業が行なわれ、それによって各時代の遺物が大量に出土したことによる。特に古代水出址・祭祀址にかかる遺物が多く、今までそのままで見守られて來たのである。昭和48年より始まった国道バイパス工事が遺跡を通過するため、県教育委員会文化課、伊那建設事務所、箕輪町教育委員会合同で現地を視察し、今後の調査について協議を行なった。その結果、昭和55年度においては、本年工事が予想される部分の道路敷の一部を確認調査し土層状況、遺物の包含状況を確認把握するはこびとなつた。その結果を検討し以後の本調査を計画することになり、9月中旬から、日本考古学協会々員林茂樹氏を調査団長とする調査団を組織し、確認調査を目的とした発掘を実施する運びとなつたのである。

イ) 調査団

| | | |
|------|-------|----------------|
| 団長 | 林 茂樹 | 日本考古学協会々員 |
| 調査主任 | 柴 登巳夫 | 箕輪町郷土博物館学芸員 |
| 調査員 | 木下 久 | 立教大学学生 |
| " | 五味 純一 | 日本工業大学学生 |
| 参与 | 馬場 瞎一 | 箕輪町教育委員会教育委員長 |
| " | 原 茂人 | " 教育委員長職務代理 |
| " | 戸田 宗十 | " 教育委員 |
| " | 桑沢 良平 | " " |
| " | 春日琢磨 | 箕輪町文化財保護審議会委員長 |
| " | 藤田 寛人 | " 副委員長 |
| " | 荻原 貞利 | " 委員 |
| " | 星野 和美 | " |
| " | 矢沢 齊治 | " |
| " | 市川 脩三 | " |
| " | 小川 守人 | " |
| " | 堀口 貞幸 | " |
| " | 上田 晴生 | " |
| 事務局 | 樋口 彦雄 | 箕輪町教育委員会教育長 |
| " | 唐沢 行明 | " 教育課長 |

| | | |
|-----|------|----------------|
| 事務局 | 太田文陳 | 箕輪町教育委員会社会教育係長 |
| " | 中村文好 | " 社会教育主事 |
| " | 柴登巳夫 | " 箕輪町郷土博物館学芸員 |
| " | 竹入洋子 | " " |

箕輪町遺跡調査会

| | | |
|------|------|-----------------|
| 調査会長 | 市川脩三 | 箕輪町文化財保護審議委員 |
| 理事 | 荻原貞利 | 箕輪町教育委員会社会教育指導員 |
| " | 細井武人 | " |
| " | 大槻剛 | 箕輪町郷土博物館専門調査委員 |
| 監事 | 小林重男 | " |
| " | 堀口貞幸 | 箕輪町郷土博物館協議会委員 |

□) 発掘調査の経過

国道工事予定地区を主として確認調査の対象地域とする。調査区は道路という性質上、巾5m余で長さ50m余という形である。排土スペースを考慮して、巾2mのトレンチを設定した。最北端の一区(2m×2m)を地層断面を調査するために約3mと深掘りした。地層断面図は第4図のごとくである。南北に長いトレンチを調査することにより、土砂の堆積状況と、その高低差を見ることができた。造構としては、調査区南端において、地表面から手掘りを行なった部分で、木構列を検出することができた。このことは今後の調査に与える影響は大きなものがあり、調査における木構列の発掘は最初のことである。調査範囲の関係上、規模も、出土本数も少なくないものであったが、どのような状況に木構が打ち込まれたものか、一部分だけでも実見することができ今後の調査における方向を示してくれた感じがする。出土土器も土師器を中心として、中世、近世陶器片も出土し、箕輪遺跡が統一していた時間的長さを感じた。

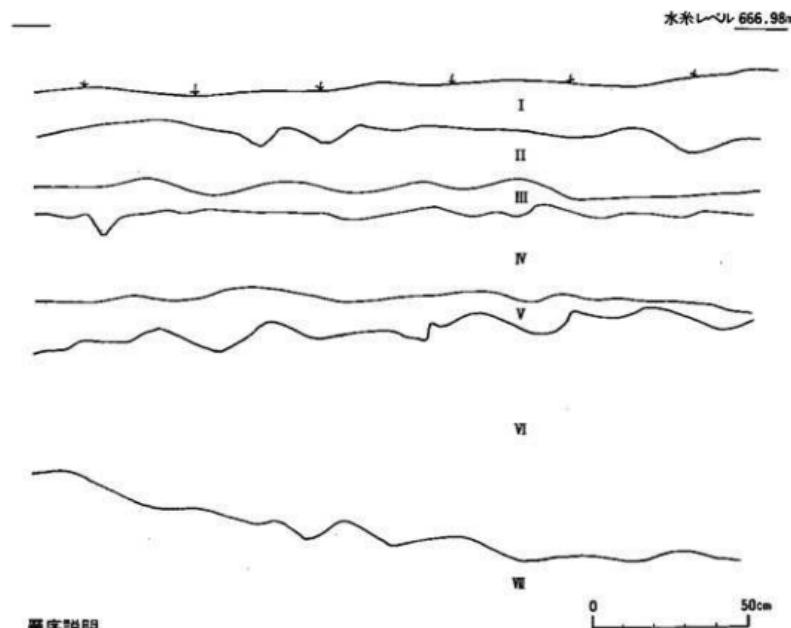


調査風景

第2節 遺構

1. 発掘区地層状況（第4図）

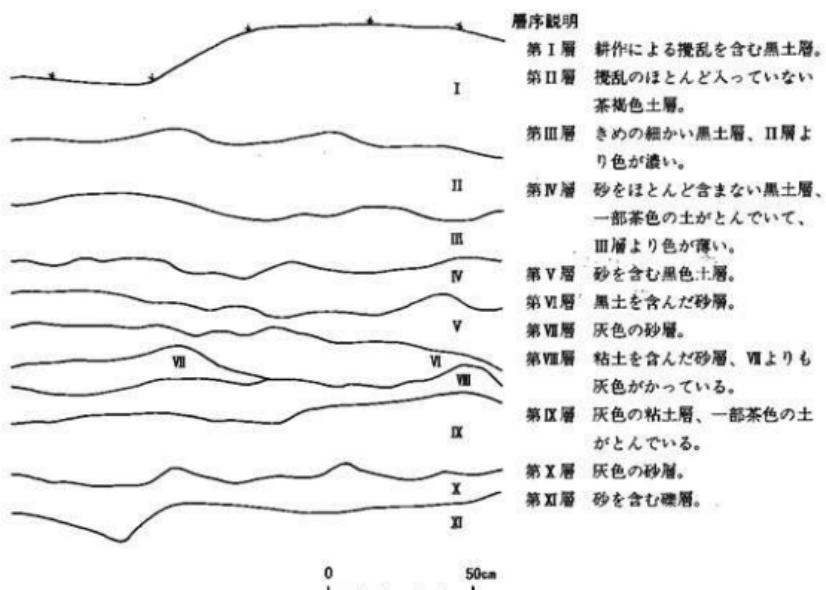
発掘区の最も北寄りの南面する部分を地層状況把握のため深耕した。自然環境の節で述べたとおり、一帯は、天竜川、帝無川の氾濫で繰り返し土砂が移動したため、場所によって地層が不規則である。地場の高低によって、耕土（黒色土層）の堆積に変化があり少くない場所では10~20cmほどしかなく、深い所では2mにも達する。こここの地点においては、50cm前後の耕土の下にごくきめの細かい砂層が40cmほど堆積している。その下は礫層である。



層序説明

- 第Ⅰ層 耕作による擾乱を含む黒土層
- 第Ⅱ層 摘乱のほとんど入っていない茶褐色土層
- 第Ⅲ層 きめの細かい黒土層、Ⅱ層よりも色が濃い。
- 第Ⅳ層 濃い灰色の粘土層、一部茶色の土がとんでいる。
- 第Ⅴ層 Ⅳ層とはほぼ同じ色の砂層。
- 第Ⅵ層 細かい砂、小石、礫を含む礫層。
- 第Ⅶ層 大きな礫、及び川砂を含む礫層。

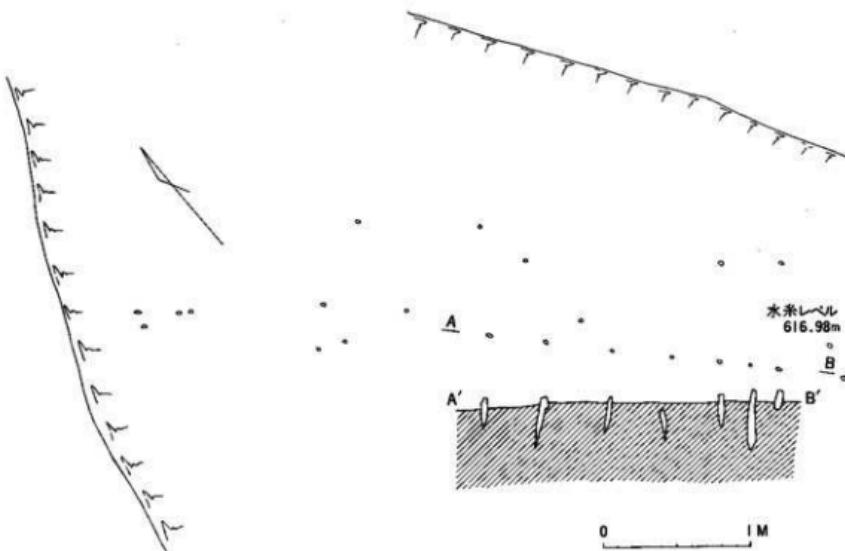
第4図 発掘区地層状況



第5図 木柵出土付近の地層断面図

2. 木柵出土状況（第6図）

調査区南端の約20mを表土より手掘りで行なってみた。その結果、地表面下45cmのところで木柵の頭が現われた。木柵は2～3列に北西から東南にはば直線に並んでいる。図に示すとおり南側の列は30～40cm間隔で杭が打ち込まれているが、それに対応している北側の列は間隔が遠く、不規則になっている。木柵は先端が鋭利な刃物で削られており、中には頭部も削ってある杭も見える。頭部も削ってある杭は打ち込まれた時のままの状態で出土しているため、その時の長さを見ることができる。それは35cmと短かい。この木柵列は何の目的をもって打ち込まれたかが最も興味をもつところである。水路の壁を強化するためとは考えられない。打ち込んである間隔や巾から推測して田の土手（あぜ）を強化させるものと考えた。しかしこれまでに出土している木柵に比べて短かく、又、太さもない。木柵も使用する場所、目的によって当然長さや太さも変えたであろうし、それを打ち込む間隔や方向を考えたと思われる。今回の確認調査においてはほんの4m程度の出土状況であるが、以前に行なわれた土地改良事業の際に確認されている総延長は、4kmを越すといわれている。これは主として旧水路に添って打ち込まれており、杭の総数は数万本といわれている。今後の調査によりこの木柵の打ち込まれた時期を決定したいものである。



第6図 木柵出土状況

3. 遺 物

(1) 木 製 品

本確認調査において最も顕著な遺物として木柵を上げなければならない。この木柵は以前に行われた土地改良事業の時期においても、最も出土量が多く、その使用目的・方法も解明されていた遺物である。今回の出土状況については前章第2節において述べているが、状況は第6図及び図版写真に見るごとくである。木柵の多くが「さわら」材で、太い丸太を割り先端を鋭利な刃物で削ってある。中には頭部もきちんと切ってあるものも見られる。杭の長さは平均30~40cmのものが多く、断面四角形のものが多い。

昭和27年から始まった土地改良事業の時には、非常に数多く出土しており、その時の状況を記した文面が残っているので参考に記したい。

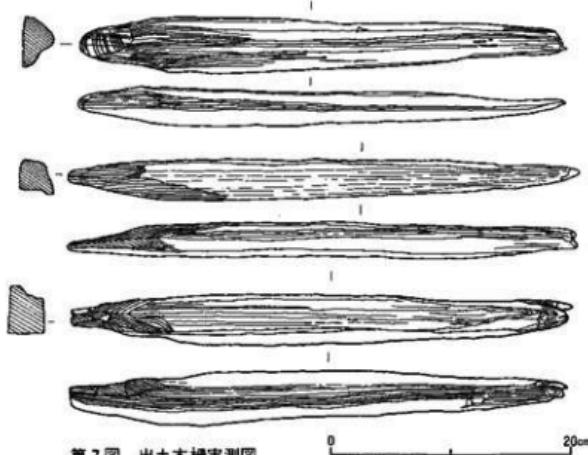
昭和29年6月土地改良事業完了の際に調査した結果によると、木柵の総延長が4375mにわたって構築されていた。その大部分が灌漑用水路の片側の通路にした畠の下にあったもので、その内945mの間は水路の両側に築かれている。

木柵の巾は、普通50cm乃至70cmくらいであるが、久保下の柵詰にあったものは1.4mの巾に棊いてあった。木柵の杭は、先端を鋭く削ってあるが、仔細にみると一本の杭の先端を削るのに刃物を使用した回数は、12、3回乃至30回に及んでいる。「さわら」の生木を削ったものであれば、今日の利器をもってすれば、精々数回の使用で事足りるのであるが、多きは、30回も削って仕上げたことをみれば、極めて鋭い切れ味の利器であったことが知れる。先端が鋭く削りきれないものをみると、原本を横に切るのに鋸を使用せず「ちような」様のもので切ったようである。多くの杭がその大部分、箇一つない柵目の立派な木を使用してあることは、今日のような利器のない時代にあって、簡単に割り得る樹種を選んだことと「さわら」の原木が豊富であったことを裏書きする。

御室田出土の木柵の杭は、17mの間で1000本を数える。全遺跡地内の木柵4375mから出た杭は御室田の例からすると約257,000本になる。この外また発見されなかった木柵列もあるうし、一般水田の下から様々な形で出土した杭も多いので、この遺跡に埋蔵されていた杭の数は実に驚くべき数字である。

以上が土地改良事業において現われた状況である。ここでは木柵に対していくつかの特徴と問題点を残している。まず材がほとんど「さわら」であり、それも柵日の削れ良いものを使っていいこと。先端を削り打ち込み良くしてある。使用する場所としては水路の片側、両側に打ち込む例が最も多い。

最大の問題点としては、木柵を使用して、水路や、畔を構築した時期である。このことは言い換えれば、水稻の始まる時期と合せて考えなければならないことである。弥生中期の木工具として考えられている各種石器の出土はこれ等の木柵を削ったり、先端を削ったりするのに使用されたならば、木柵の始めをこの時期にまでもって行くことになる。これ等のことは今後の調査により解明していかなければならない。



第7図 出土木柵実測図

第III章 大清水第I地点発掘調査

第1節 調査の経過

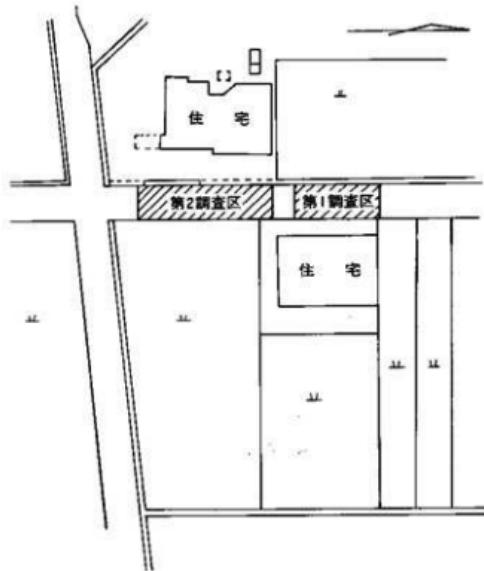
1) 発掘調査に至るまで

本地区は天竜川面の沖積地に所在し、木下・大清水地籍にかかる水田地帯で、最近になり急速に宅地化が進んでいる。一帯は昭和27年より行なわれた土地改良事業により、水田の区画が整然としている。本地区一帯が一大遺跡地帯として注目されるようになったのはこの地域に土地改良事業が行なわれたことによって、各時代の遺物が多量に出土したことによるのである。特に古代水田址、祭祀址にかかる遺物が多く、今までそのまま見守られてきた。

昭和53年1月に都市計画法に基づく木下都市下水路工事が決定された。それに伴い、昭和55年度において、大清水地籍にも下水本管が布設される計画が決定した。その計画路線内に土地改良事業において多量に遺物の出土した場所が近いため、一部分のみでも発掘調査を実施してから、工事を行なうことになった。そのため10月下旬より11月上旬にかけて、発掘調査を実施するはこびとなつたのである。

2) 発掘調査の経過

昭和53年1月7日に都市計画法に基づき計画決定された木下都市下水路は、木下地区市街地の拡大に伴う雨水の流出量増加による市街地浸入を解消するため、総延長1,280mの下水路を昭和52年度から着工し、昭和59年度完成を目標とし、都市計画下水路事業として計画実施しているのである。この計画に伴い、本年度の予定地区内に遺跡が含まれるため発掘調査のはこびとなつたのである。本年度工事分の9割近くが、以前に水道本管布設工事時において、ほとんど掘り返えされており、又、調査対象も工事の行なわれる道路面のみであるため、この地域は除外し水道本管工事の行なわれていない

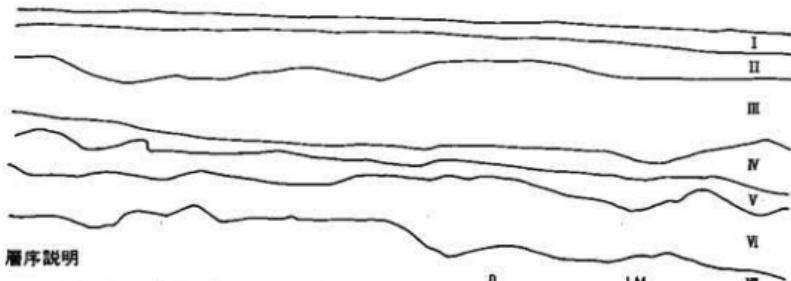


第8図 発掘区域図

部分のみを調査することに変更した。そのため、当初の計画よりも規模を縮小し、調査面積、日数等もそれに平行して少なくなったのである。又、調査地が二カ所の住宅前の道路であるため、車の出入りができるような配慮が必要となり、そのため調査区を二カ所に分け、一方を完了してすぐに道路に復帰させてから次の所に手を付けるという方法をとった。

まず調査区北側の第一区より初め、路面の舗装コンクリートを重機で取り除く作業より開始する。ここ一帯は大清水地籍内における遺物多量出土地に近いため、木製遺物が出土するのではないかという期待を持っていたところである。調査区のすぐ西（約50m）にマス池があり、この工事の時に多量の木製遺物が出土していたからである。舗装面下にはジャリ層が15乃至20cmあり、その下に黒土層が30乃至40cm堆積している。この黒土層が遺物包含層であり、ここから土師器の壺底部等が出土している。前述のように木製遺物や木構列がこの範囲に含まれて出土するかもしれないという期待を持ったが、10m余という短い区域内であったため、第一区内からは土師器を中心とした土器片がわずかに出土したのみであった。第一調査区の作業を完了して埋めもどしを行ない、続いて第二調査区の作業を開始する。11月に入り、連日寒い日が続き、作業には厳しい毎日であった。第二調査区においても同じような作業を続けた。調査区の南端より木製の「しゃもし」の半分とみられる遺物が出土した。第三層の黒土層中よりの出土で、大きさは20cmほどである。

第二調査区における作業も三日間ほどで終り調査を終了したが、調査地が道路であり、面積も少なかったため、当初予想したような遺物の出土はなかった。しかし少ない面積の中においても、土師の壺や、木製遺物の出土があったということは、一帯に各種の遺物が包含されていることを証明した。その点において一応の成果を見ることができた。



層序説明

- | | |
|-----|--------------------|
| 第Ⅰ層 | 道路面（コンクリート） |
| 第Ⅱ層 | ジャリ層（コンクリート下のジャリ面） |
| 第Ⅲ層 | ごく細かな黒色土層 壓い |
| 第Ⅳ層 | 鉄分を含む少し赤味のある層 |
| 第Ⅴ層 | 第Ⅳ層より赤味の弱い小石を含む層 |
| 第Ⅵ層 | 灰色の粘土層 |
| 第Ⅶ層 | 砂利層 |

第9図 第1調査区層序図

3) 第1調査区層序

第1調査区のはば中央の東面する部分を基本層序把握のため深耕した。自然環境の節で述べたとおり、一帯は、天竜川、帶無川の氾濫で繰り返し土砂が移動したため、場所によって地層が不規則である。舗装面下にはジャリ層が15~20cmあり、その下に黒土層が30~40cm堆積している。この黒土層が遺物包含層であり、その下は、粘土層、砂利層である。

第2節 遺 物

1. 出土土器、陶器

第一・二調査区全体より土師器を始めとして各種の土器、陶器類が出土した。実測できるものとしては第10図に示した土師器の壺底部2片である。いずれも胎土中に雲母を含み、黄褐色を呈している。ロクロは右回転をしており、底部には糸切り痕を残している。須恵器の环口縁部片が第一・二区よりそれぞれ出土している。いずれも口縁部小片であり、器厚は4mmを計る。その他として灰釉陶器片や、内耳土器口縁部片、天目茶碗片等中世から近世にかけての陶器、磁器が出土した。そのいくつかを第10図版に示した。

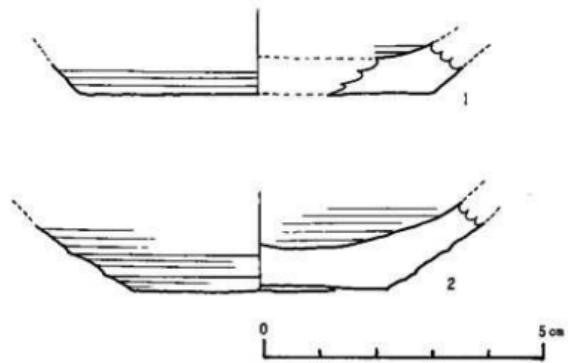
2. 木 器

第二調査区の南端地表下40cmの黒土層中より第10図に示すような木製遺物が出土した。全長21cmほどの板状の遺物で一辺を削ってあり、残った部分からの推定では、御飯を盛る時に使う「しゃもじ」のような形と考えられる。上部・下部共に欠損しており、又縦にも割れたと思われる。これがどのような道具の一部分か決定はできないが、土師器等を出土する土層中よりの出土であるため、同一時期の木製遺物と考えたい。この木製遺物が出土したことは、この土層中に類似する木製品が含まれていることが当然考えられる。一点の遺物であるがその意義は大きい。

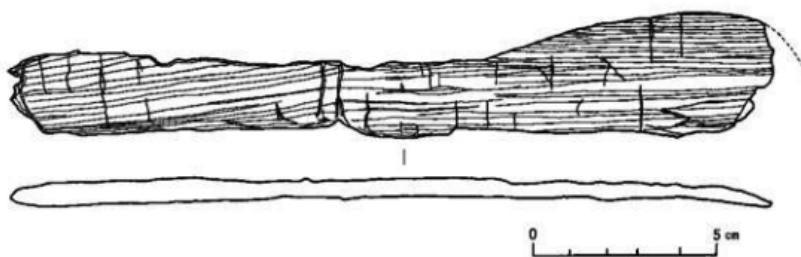
3. 有機質遺物

本調査区から出土した遺物の中にモモの実、クルミ等の有機質のものが含まれている。いずれも排土作業中に発見されたものであるため、正確な層位を確認できなかったのが残念であるが、第Ⅲ、Ⅳ層中であろう。本調査区から50mほど西側で、以前マス池工事の際に多量の食物残渣が出土したと記されている。それ等は、クルミ、モモ、とうら、梅、酢モモ等の各実の類、どんぐり、夕顔の実、ウリの実、カボチャの実、モミ、松葉などが出土した。

クルミは核の表面がなめらかで、やや薄く、形は心臓型である。これは原産のオニグルミの種類と考えられる。モモの実、クルミ共に形は良く残り、依存状態は良い。第Ⅲ、Ⅳ層中より出土した木器や土器類と同一時代のものは不明であるが、今後の調査に慎重を期したい。



第10図 出土陶器実測図



第11図 出土木器実測図

第Ⅳ章 所 見

今回、箕輪遺跡の内の小清水第1地点及び大清水第1地点の緊急発掘調査が行われ、その状況が前述のように詳細に記録報告されたがその意義は、すこぶる大きいものがある。

その1は、昭和27年、当町の天竜川沿岸西部の水田耕地整理事業が実施された際、水田床面下層から、広い範囲に亘っておびただしい木構列や木製品、土器、陶器等が出土してきた。この状況にいち早く着目した地元の小池修兵氏や小川守人氏らによって採集され、さらに国学院大学教授大場磐雄博士や信濃史料調査員藤沢宗平氏らによって観察調査され学問的な見解が加えられるに及んで、本県には数少ない低湿地遺跡としてクローズアップされ、学界の注目を浴び、極めて重要な遺跡として認められるようになった。しかし、偶然の出土であり、学問的な発掘でなかつたため、時代的な位置づけや、遺構の性格は、推定にとどまっており、弥生時代から近世に至る数時代の間の所産として概念的に把握されているに過ぎなかった。今回の発掘は、小規模ながら初めて考古学的なメスが箕輪遺跡に加えられたことそのものに意義があるのである。

まず、小清水第1地点の状況であるが、道路用地内に限定されたため、長さ20mのやや巾広なトレンチ調査が行われた。このトレンチの最南端部において第Ⅲ層中に、トレンチに直交するよう長さ4m、巾70cmの木構列が発見された。木構列は東西方行に走り70cm間隔で2列に構成され、そのうち南列は17本の木構が40cm間隔で直列し、北列は7本で80cm間隔で直列して泥土層に打ちこまれていた。この両列内の土層は両外側と同じであったがやや固目の感じがあり、軟質の泥土層の中に造られた畦道ではないかと推定された。これに共伴した遺物は、小さな土器類破片13片である。分類すれば、土師器壺2、鉢1、甕1。須恵器の碗1、甕1。中世の内耳土器破片4古瀬戸天目茶碗1。近世の高台付陶器1、壺1であった。

いずれも第Ⅲ層中に含まれていて上下関係も混在しており、木構列との関係は確定でき得なかつた。少くとも、平安時代から江戸時代初期の間に構成された木構列であることはまちがいないと思われる。

なお木構出土地点より北方のトレンチでは、地層の堆積状況が明確に見られ7層から11層に亘る複雑な堆積が行われていることが明らかとなった。そして北方に至るにしたがい、やや勾配をもっていることから、北方方向即ち西方段丘から天竜川に向って供給された堆積物であり、天井川形成による自然堤防状の一地点であることが看取された。木構列は自然堤防の末端部分即ち湿地帯の汀線附近であり、ここに水田が営まれていたことが推定でき得るのである。

次に大清水第1地点についてであるが、水道工事のため道路面に巾6m、長さ40mの計240m²のトレンチ調査溝が設けられたわけであるが、遺構らしきものは発見されず、第Ⅲ層即ち、水田床面下から若干の遺物が出土した。遺物は、土師器片16片、須恵器片2片、および籠状木製品1点、果核(クルミ及びモモ)4個であった。土師器は真間式に比定されるものであり、須恵器も新しい要素が認められることから八世紀ごろの所産と思われ、比較的、単一の時代を示すものと考えられる。

以上二つの地点の発掘を総合してみると、小清水、大清水、地籍は、東方200mに、南流する天

竜川との間に形成された自然堤防の内縁部に当たり、西側の内縁部と、西方現鉄道線路附近の低位段丘との間にはほぼ巾200m近い湿地帯が形成され、段丘崖下の湧水が広く湛えていたものと思われる。20数年前の土地改良時に出土した木構列総延長4,375mは、この地帯に集中していたことを考え合わせればここが弥生時代以降、水田地帯として利用され人々は小清水、大清水、苦谷、西川原一帯の自然堤防上に集落を営み、営農を長く続けていたことが推定されるのである。この意味で今回の調査は、従来の箕輪遺跡研究の初期段階から一步を進めたことになるのである。しかしながら、出土遺構や遺物の年代決定が明らかに確定できなかったことは誠に残念であった。

箕輪遺跡の正体を解明するためには、遺構としての水田面の状態、その時代決定が何よりもまず要求されるのである。これにより、前回出土の膨大な遺物の性格や内容が確定化されてくるのである

その第2は、今回の発掘により提起され、今後の調査により解決していかなければならない問題点がいくつか提起された。

1. 箕輪遺跡は少くとも100ヘクタール以上にわたって展開する大遺跡で、大別して7地区、細別して32地籍の広範囲に亘っており、箕輪遺跡群と称すべき低湿地遺跡である。

このため、まず現公園上に32地籍を更に細別した遺跡地点のそれぞれの範囲を定めて明示しておく必要がある。

2. 発掘調査は、緊急発掘を含めて、どんな小範囲であっても必ずしも実施すべきで省略などは決して許してはならない。土層の堆積状況が必ずしも単純でなく自然堤防内縁部と湿地帯の汀線を明らかにするためには、数多くの発掘が必要であり、これを累積し統計化することによって初めて可能となるからである。

3. 発掘調査に当っては、特に土層の堆積状況と遺物の上下関係が明らかにされなくてはならない。このためには土壤学的な分析、鉱物組成による土壤構造の解明が是非とも行われるべきであり、専門研究者の参加が要請されるのである。

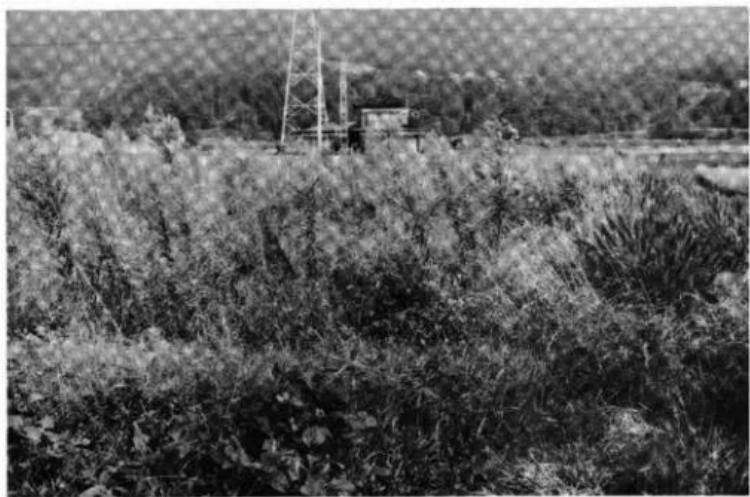
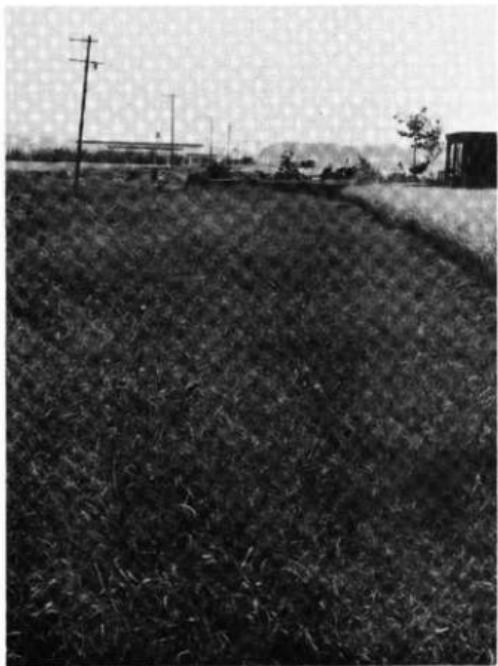
4. 土層の解明にとってももう一つ必要なことは、堆積各土層中に含まれるプラントオパールの検出である。数時代にわたる水田面の検索や植物相の復元にとってこの科学的手法が是非導入されるべきである。また出土木製品や果核類の植物学的解明も精密に行うべきであろう。

以上、今後の調査に当って、時代的位置づけを明確にするために必要な調査上の問題点について記した。

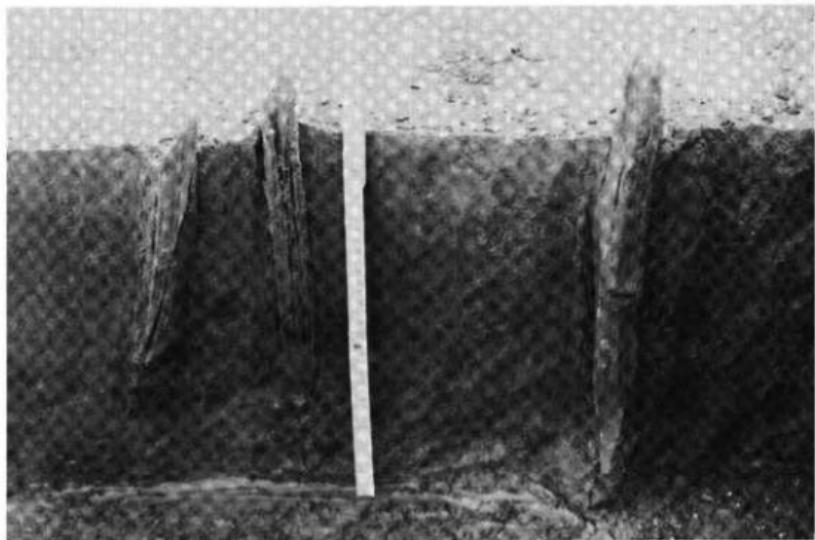
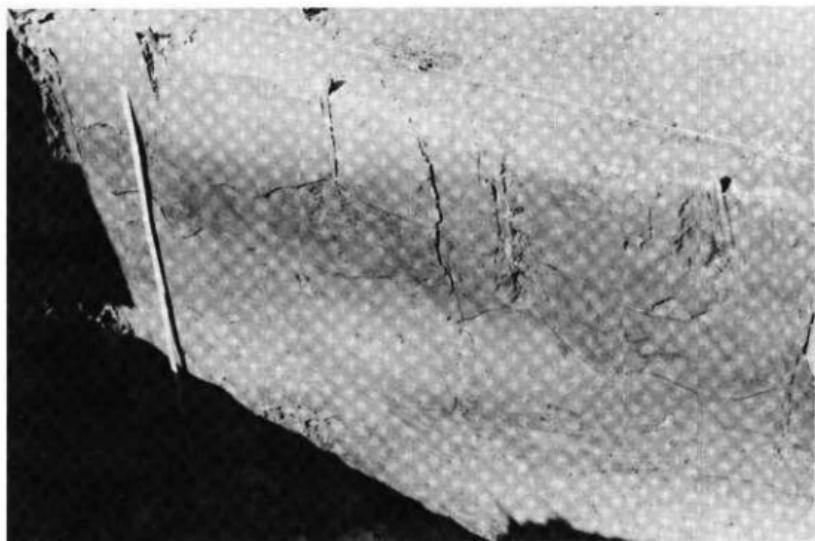
このような諸科学の導入については、調査費も他の乾地性遺跡と異って、一段と費用も増すことになるが関係諸機関の御努力によって、これらの困難を克服され、本県下に極めて稀な低湿地遺跡としての箕輪遺跡群の解明が一段と発展されることを願って止まない次第である。

(調査団長 林茂樹)

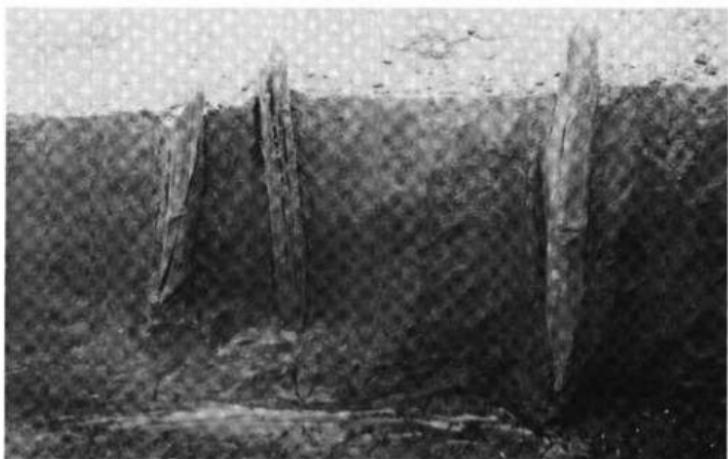
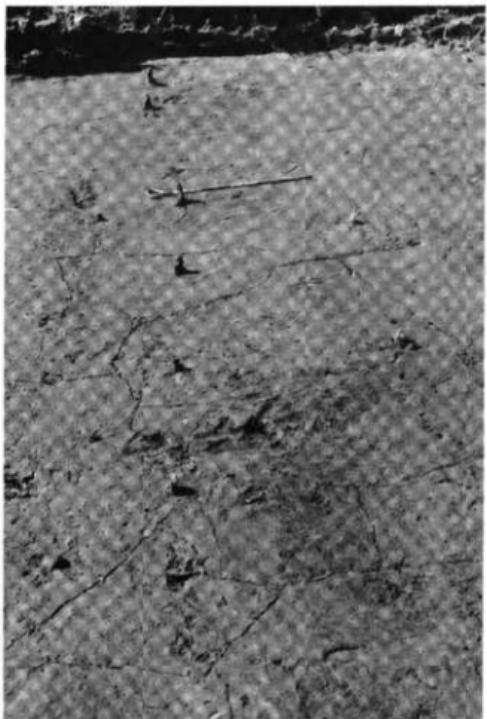
図 版



第1回版 小清水第1地点近影



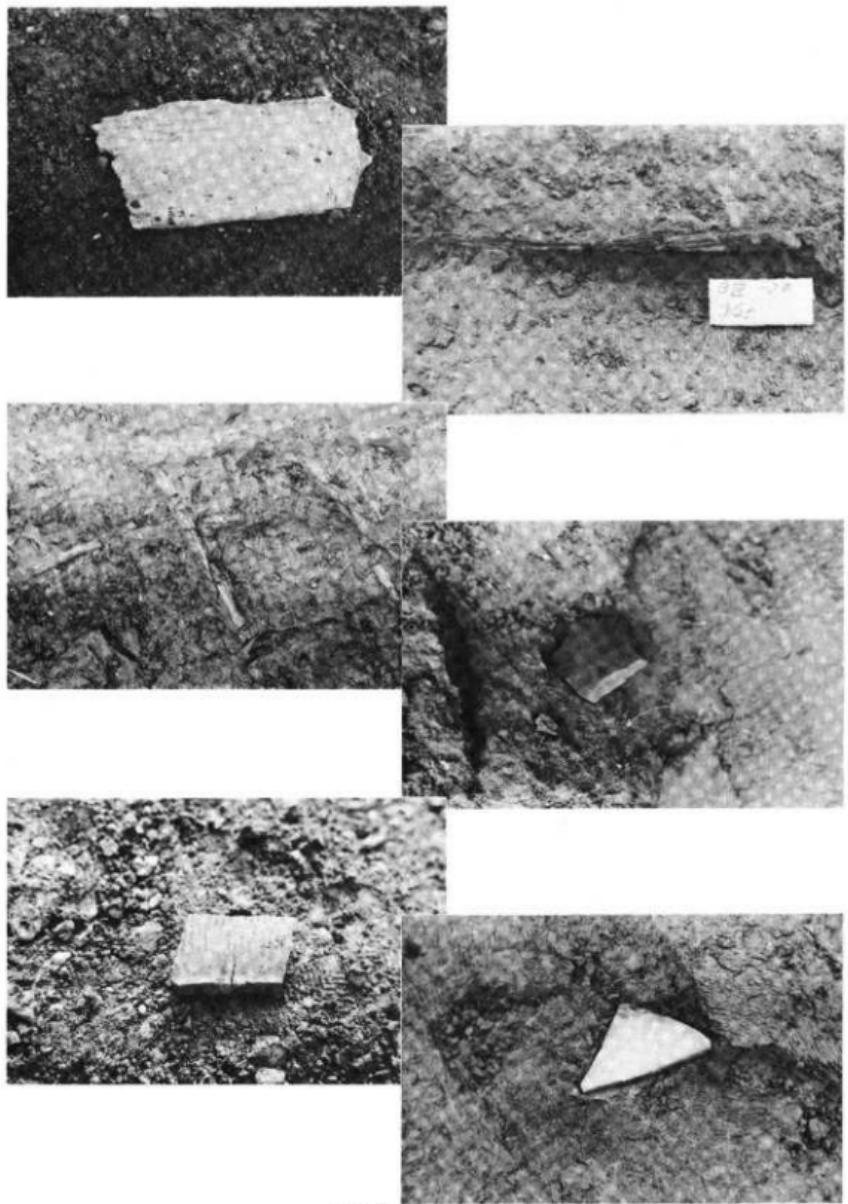
第2図版 木柵出土状況



第3回版 木柵列状況



第4回版 発掘調査風景



第5回版 遺物出土状況



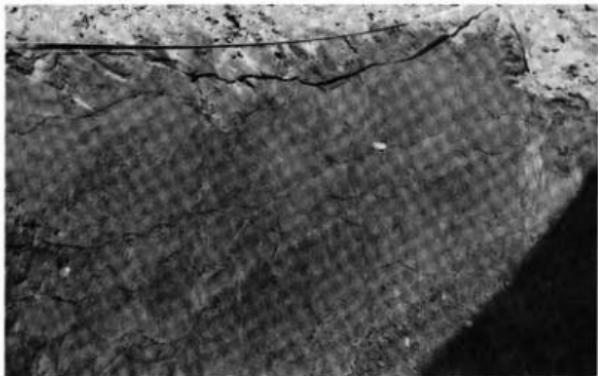
第6回版 調査風景及び記念撮影



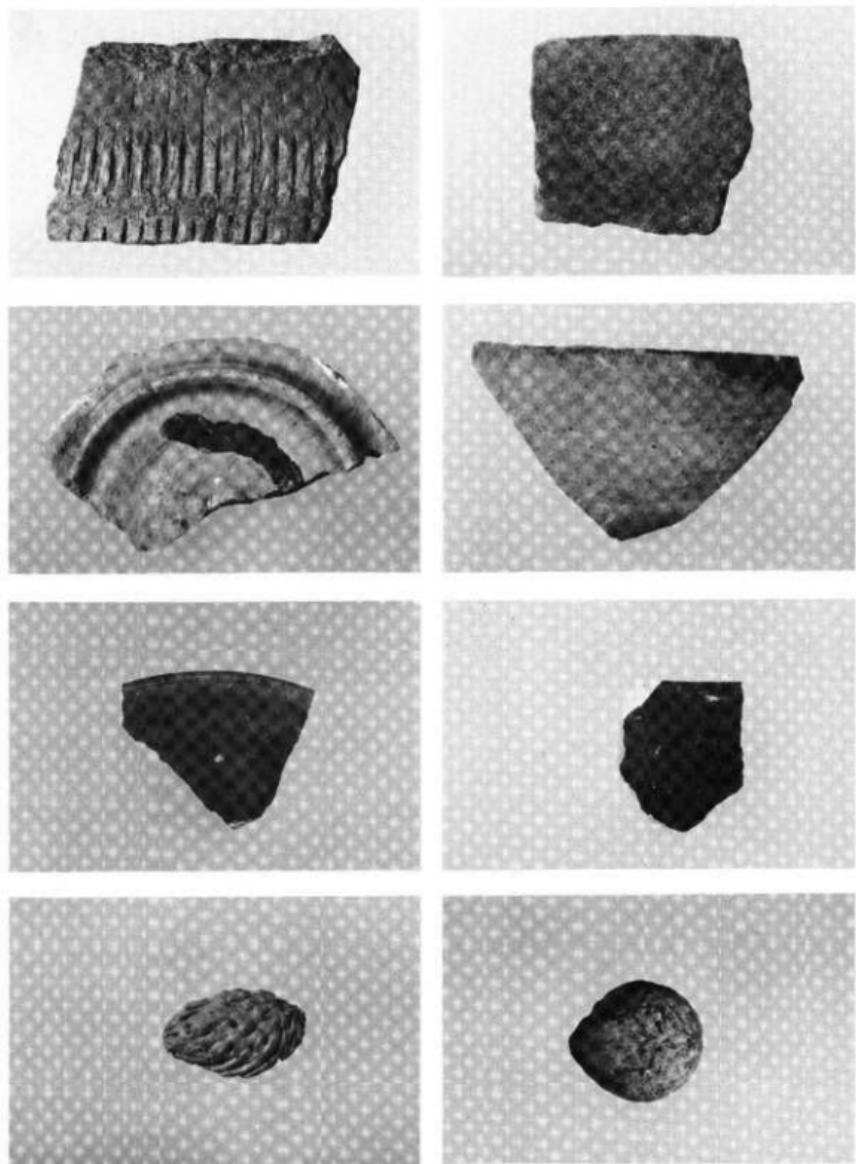
第7図版 大清水第1地点近影と調査状況



第8図版 発掘調査風景



第9図版 調査地地層状況、遺物出土状況



第10回版 出土陶器、有機質遺物

[付録]

箕輪遺跡中間報告集

(付録解説)

ここ数年来、基盤整備事業に伴い、埋蔵文化財の発掘調査の機会が多くなり、また、これらに対する理解がだんだん深くなってまいりました。箕輪遺跡も例にもれず、昭和55年度、前述のように、国道バイパス等が通過するにあたり、本年度より発掘調査事業を始めました。

この遺跡は、昭和27年からの土地改良事業が行なわれた折、故小池修兵氏及び小川守人氏両氏が採集した遺物により、県下でも珍らしい木製品出土の遺跡として紹介され、学界でも注目されました。現在のように、多量の遺物が出土しても工事がストップされる訳でもなく、調査費用もつかず、工事のあい間に採集し、わずかに心ある人々によって保存運動がなされ、今日に至っており、これらの遺物は、現在、箕輪町郷土博物館に展示されている。

箕輪遺跡の発掘調査は、本年度のみでなく、これからも何年かは、継続していくものと考えられます。今回発掘されたものは、以前に採集されたものに比べ、ごくわずかであるため、今までに採集されたものも、ここに参考資料として紹介し、今後の研究の参考としたい。

そこで、当時活動していた箕輪史研究会の研究報告書に数々の貴重な資料や報告がありますので、原文のまま掲載しました。遺物（土器、石器、木製品等）は、実測しなおし、来年度の報告書に紹介します。

なお、昭和29年当時の報告ですので、小池修兵氏はじめ、当時箕輪遺跡にかかわった方々が幾人かは、すでにご他界されておりますので、御了承下さい。

その当時、実に多量の遺物が出土したにもかかわらず、残念なことに、土木工事の合間に調査されたものであるため、本遺跡を特徴づける木構造、木製品及び種子類の時代的位置づけが充分なされないことと、その他の遺物を合わせて相互の関係が必ずしも明瞭でないことです。

しかし、職務のかたわら、多量の遺物の採集・整理につとめられ、克明に記録された故小池氏・小川氏・両氏の業績は、20数年経過した今日の発掘調査の参考になり、両氏の意志に報いるためにも、今日、我々は、より実のある調査をしなければならないと思います。

ここに掲載できないものにつきましては、参考資料として下記へ目録を付記します。

箕輪遺跡関係資料目録

- | | | |
|-----------------------------------|----------|--------|
| 1. 「箕輪遺跡報告」 箕輪史研究資料第2集 | 昭和29年3月 | 箕輪史研究会 |
| 2. 「箕輪遺跡中間報告」 箕輪史研究資料集第2号 | 昭和29年6月 | 箕輪史研究会 |
| 3. 「第2回箕輪遺跡中間報告」 箕輪史資料集第3号 | 昭和29年9月 | 箕輪史研究会 |
| 4. 「農業信州」 箕輪遺跡にみる農業と文化—現農村の母体を形成— | 昭和29年6月号 | 藤沢宗平 |
| 5. 「信濃」 長野県上伊那郡箕輪遺跡について | 昭和30年2月号 | 藤沢宗平 |
| 6. 「伊那路」 箕輪遺跡第3回の報告にかえて | 昭和33年5月号 | 小池修兵 |
| 7. 「伊那路」 上伊那郡箕輪町発見の祭祀遺跡 | 昭和39年1月号 | 大場盛雄 |

1. 序 文

(1) 美輪遺跡の中間報告に寄せて

美輪遺跡の中間報告として、現在まで発見された遺物と、その出土状況について一応まとめられるといいますので、この遺跡の意義について少し述べ序文にかえたいと思います。

この遺跡の性格の把握は、正確な発掘と、遺物の緻密な調査を絶なければ、あるいは事実と相違しておるかも知れませんが、その機会が早急に与えられませんので、見たままを記してみたいと思います。

先づ注目されることは、遺跡の主体が農耕生活を背景とするもので、且つ低地遺跡であることです。低地遺跡であることは、遺跡の性格上、報告にもみられるように、多くの有機質遺物を出土しています。ただ残念なことは、これらの有機質遺物について、一々時代的配列をなし得ないことがあります。弥生時代に属せしむるべきものか、土師器、須恵器時代に属せしむるべきものかあるいはそれ以降の陶器の時代に及ぶべきものか、とにかく判然としていません。弥生時代に属せしむるべきものとすれば、2千年に近い時間を経ていることとなり、新しい陶器の時代に属せしむるべきものとすれば、僅々数百年の事にすぎません。しかも見たところ、全ての遺物が同時代のものではなく、その間に時間的巾があるらしく思われます。このことは、今日のところ一面、この遺跡の致命的欠陥といつてもよいのですが、他面それらのうちの最も新らしいと思われるものも、今日の生活においては、その使用が既に忘れられているものであって、その意味において、やはり過去の生活を知る資料として、重要なものといわねばなりません。

時間的新古を問わず、このような遺物の発見は、あるいは各地に多いかも知れませんが、學問的に調査され、報告されているものは、極めて少く、全国的にみても十指を余り出しています。もちろん県内においては最初のことあります。

従ってむしろ、今後積極的に學問的調査がなされて、それらの遺物について、時代的配列ができるよう努力することが期待されるのであります。この中間報告が、かかる機運をつりあげる因子ともなれば、はなはだ幸いといわねばなりません。

然しこのような中間報告がなされるについても、「美輪遺跡」の誕生は勿論、美輪村当局あるいは郡文化財調査委員会あるいは有志の方々の御努力によるものであることは言をまちませんが現地において、嘗々として遺物の収集に当られた、小池修兵、小川守人両氏の御努力は多とせねばなりません。

序文など書く筋合ではありませんが、一応中途から、ずっと遺跡と遺物を見させていただいておる関係上、いわれるままに、一言述べてみました。

昭和29年4月28日

東京の下宿に於て

長野県文化財調査委員 藤澤宗平

(2) 序

当地の土地改良によって、今回はからずも箕輪遺跡が発見され、貴重な多くの出土物を得て、すでに中間報告を公にする段階に達したことは、まことに喜びに堪えない。

古来『温故知新』というが、得難い数々の出土物を調査して、当地が重要な遺跡であることを想うとき、新時代の土地改良事業が決して故なきにあらずと信じられて、自ら微笑を禁じ得ないばかりでなく、この遺跡が必ずしも斯界に貢献することが大きいと思われる。

目下工事中の地域だけでも70町歩という広範囲であり、且つ工事中にて調査は極めて困難を伴うことと思われるが、可能な限りの調査を遂げ、万遺憾なきを期せられたい。

なお調査と出土物の収集整理とには、多数の人々が心から協力せられ感謝に堪えないが、殊に直接調査に当られた関係各位に対しては、その労を多とするとともに、深甚な敬意を表する次第である。

昭和29年3月

上伊那郡文化財保護調査会長 那須重徳

(3) 序

伊北箕輪地方一帯の埋蔵文化財については、さきに島居博士によって、主として山麓地帯縄文文化を中心に研究が行われ、更に昭和12、3年頃西天竜開田作業にて、地区内全面発掘による研究があり、近くは去る27年、藤澤先生の縦密なる全面調査によって、大方その全貌を明らかにせられた観があったのである。

しかるに、たまたま今度天竜川沿岸西方水田地区の耕地整理が行なわれるや、箕輪、中箕輪、南箕輪にまたがる広大な地域に弥生以降的一大遺跡が発見せられ、極めて貴重なる資料が続々と発掘され、今猶その事業継続中であり、殊に從来その資料に乏しかった耕作文化の上に一大発見を見るに至り、斯界に重大な関心がよせられつつあるのである。

此等研究の進むにつれて、さきに明らかにされなかった、木下南城及び北城北垣外等、段丘上の弥生時代以降の住居址との関連をも考えられて、幾多重要な問題が展開されると思われるのである。目下それぞれ専門家指導のもとに整理続行中であるが、すでに中間報告の意味において、一応今日までの概況を取りまとめて発表することになった次第である。元より再吟味を要する幾多の問題を含みながら、取敢えず地元各位の整理の実相を、唐突の間に発表する必要に迫られ、總ては今後詳細なる整理研究の結果にまちたいと思う試である。

昭和29年3月

箕輪史研究会長 有賀京一

2. 箕輪遺跡を観て考う

岩崎 長思（佐久史談会長）

上伊那郡史時代を去る約40年、私は大正12年以後は善光寺平誌に着手、未開の地域に見出したことも少なくなかったし、かなり勉強にもなった。昭和8年からは佐久誌に転じ、伊那のことはとくに疎遠になった。今春新聞にて箕輪史跡を読んで、驚異の目をもって見た。3月旧友北村勝雄君からの誘導をうけ、信州における未発の遺跡をみると心動々禁じ得ず、4月18日、桜花らんまんの候ながら、予定を変えず朝来のにわか雨をついて、小出島孝雄君に助けられて、老歩を伊那路に向かた。松島駅下車、自動車による、60余年前遊学した箕輪高小所在の旧地松島を窓外にし、その意外に変化した町勢におどろき、帶無を渡って徒步坂下へ往復した昔の木下を心に画き、木下駅に憩々の北村君と同車し、遺跡地を徐行して、発掘地籍の示教をうけ、下の橋を渡って、箕輪村役場で下車、すぐに小池修兵君の宅を訪う、午後1時すぎ。やがて笠原政市君来会、小池君の収集した山なす所蔵中の代表的なものを一々手にしつつ三君の示教あり、詳密な地図までもみて、よく丹念に収集研究を積みたりしに敬服し又興味津々。約2時間。感謝して辞し猛雨をついて小川守人君の宅を訪い、小池君宅と同感想を以って代表品をみ、バス時間あり惜しくも1時間半に厚く感謝して辞す。自動車は雨のため来ず、幸、村農協のジープに乗車するを得小池、小川両君同車せられて5人にて木下に出するを得た。なお小池君方に同村医師鳥山袈裟治氏の来会を煩わした。氏が今回の採集地域の中心たる田巾城址の一部土星と石祠との保存に尽力されたのに敬意を表わした。帰佐後佐久誌研究等の内に居ても郷里箕輪史跡への追想は去らず、同好の僚友にも語り、往訪を勧め、たまたま来佐の国学院大教授大場博士にも報告した。最近藤沢宗平氏より農業信州6月号所載箕輪史跡抜刷の寄贈をうけて同誌のそう図と併せて精読し、統いて小池君より箕輪遺跡中間報告を寄贈されてこれ又耽読し、且つ考察した。我齢ではしばしば往跡研究の時を得がたい。すなわち今日までの見聞による所見を略記して御参考の一端としたい。

(1) 地域について

三峰川の天竜川への押出しは天竜の水勢をかなり左右している。伊那町から上流は緩やかで、春近からはこれより急である。この押出しによって上流は氾濫による天竜両岸の段丘を複雑にし、広くもし、そこに貯留し、川に沿って沼沢を作った。伊那電初開の頃、大出たんばで動搖を感じ、松島駅の北も同じく、殊に木下をはずれてから伊那北駅にいたる間は大泉川の微弱地域を除いては実に不愉快な左右動を感じた。伊那町以南にも5分間位の動搖があった。中央線初開の頃上諏訪茅野間の底無たんばの小区域に同様の感覚が起ったのに似ている。だから箕輪遺跡と同様なたんばが大出たんばからずっと電車動搖地域にもありそうなものだ。箕輪たんばが帶無押出しの陰に開けたとすれば、大泉川や小沢川のかけにもありそうな推考ができる。弥生期の新田初開は川沿いの自然流水を得るところに行われた。それは冒険であるが、災害は農業のみではない、海川山獣も同様である。人類はこれらを克服して進んできた。だから川道の変遷や水勢水量は地方誌研究の基本の一つである。善光寺平誌研究ではこれに着目した。広い新しい学問である。

(2) アシの層について

耕土80cmの下に20cmのアシの層があって、その層上に土器の破片などのあることは興味を引

く。箕輪開田の頃アシ原であった。いやアシのなびくところに開田したのである。「豊葦原の
瑞穂」という話は古い表現にちがいない。アシや萱、菅、カマは原始人の生活の必需植物であ
った。

(3) 稲作について

稲は熱帶性植物であるが、冷気に馴れやすく、酸土にも強い。信州では下伊那南部から天竜
に沿って北上した一路を考える。弥生時代にはどんな米がとれたか、当たりがつくだろうか。
後々天竜川沿地帯の産米が福井城を生み、源氏を強城主ならしめた。

田中城が近代的な平城になったのは、松本城・松代城・高島城と同一で、その水溝を城防に
利用し、且つ周囲の産米をあてにしたものであろう。兵と水と米とを分離しないでなければ経
済的であるが、慶長17年の洪水でこの企てはこわれた。

(4) 田中城について

その構造の想定をできるだけはっきりしたい。城はキ。木戸口は城土口。木下は城の下なら
ん。

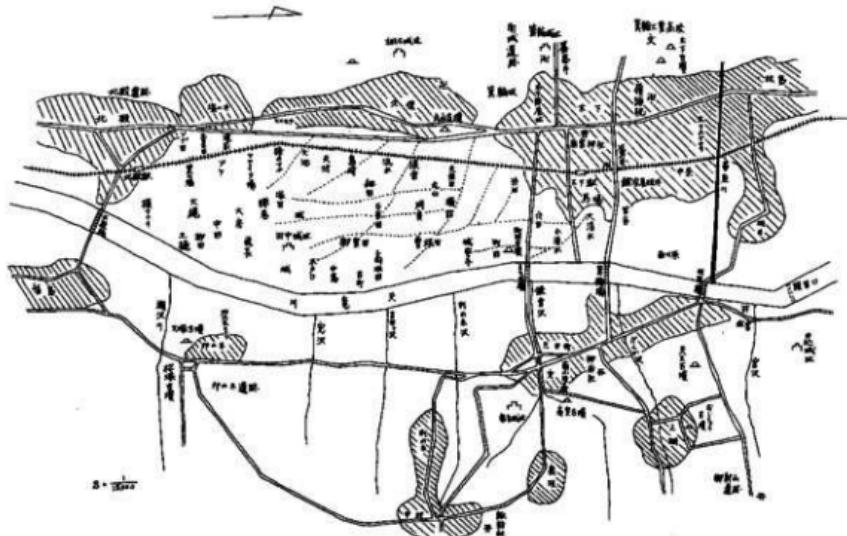
(5) 天竜川道の変動を明らかにしたい。前記の理由による。

(6) 小段丘なりとも判明にしたい。

(7) 後記

小池、小川両氏の力を多大なりとします。殊に歴史的考察を加えたことは常人のなさざる所
です。その上図上に表わしたのは一層学的でうれしいことです。以上は忙中の略記に詳述の時
を得ず。自ら寸観感を覚える。発掘品については余の序説を要しない。

(昭和29年5月28日 信濃資料編集・郡町誌編さん 佐久史談会長)



3. 箕輪遺跡の今後について

藤澤宗平

前回の中間報告以後、箕輪遺跡から発見された遺物は、その質量共に若干増加している。しかしながら、その遺跡の重要な部分を占める木柵址、木製品については、その時代を結論できるような状態は発見されていない。したがって遺跡全体の性格については、私がかつて「農業信州」に紹介した程度を出ていない。しかも今秋は、段丘寄りに更に工事が実施されるということなのでこの機会を失しては、この遺跡の性格を追求することは益々困難になることと思う。大方の協力と応援をお願いしたく、感じたままに筆を執ってみたい。

箕輪遺跡の重要性については、それが低地遺跡であり、農耕生活の反映であることは既述の通りである。しかも今までに報告された有名な低地遺跡の多くは、海岸寄りにしか発見されていない。この遺跡が山間地域におけるものであることは、山間地域の原始農業社会の農耕技術をはじめ社会経済、そしてその時代の文化がいかにして営まれていたかを知る上において重要な遺跡といわねばならない。おそらくこのような遺跡は他においても存在したであろうし、また工事などによって地上に露出したことがあったに違いない。しかし不幸にして余り注意をひかないうちに遺跡は破壊され、遺物の多くは再び埋没してしまったか、四散してしまったものと思われる。この遺跡は、そのような中において、とにかく深い注意と努力によって遺物も収集され、遺跡の性格を追求しようとする努力が払われてきたのである。この企画に有終の美を与えるものは、この遺跡の全般的性格がはっきりすることでなければならない。今後の調査について細かい問題をあげてみよう。

① この低平なる土地に、深い関心を先づもった人々は、今までに発見された遺物の示すところによれば、縄文式文化の末期頃の人達らしい。したがって、それ以来ずっと現代に至るまで各時代の人達が関心をもち続けたものとすれば、おそらくこの土地からは、その後の各時代に使用されたものが多かれ少なかれ発見されねばならない。このような場合にその時代的秩序を知るには発見される遺物の前後関係の解明こそ最も近道である。もちろん何かの理由で一時この地域に対する関心が薄れたとすれば、その時期の遺物は非常に少ないか全然それをなくかのいずれかである。現在欠けているものを知り今後の工事によって、果してそれが事実か否かが確かめられねばならない。最初に縄文式土器の末期頃のものが発見されていることを述べたが、この縄文式土器から櫛目文をもった弥生式土器に至る過程がいさかはっきりしない。縄文をもったこの地方としては、弥生土器の中でも古いとされているものが若干発見されてはいるが、その量は少なく、その質においても不十分である。少ないことが事実かもしれないが、それにしても前記二者の関係がこの土地への関心をもつという点においてスムースに説明できるような状態を知りたい。いいかえれば、縄文式土器から弥生式土器への移行過程を知りうるような資料が発見されたならと思うのである。なお、この問題に関連しては3.においてさらに述べたい。

つぎは弥生式土器から土師器への移行についてである。現在のところ、この遺跡では、他地域におけるような弥生式末期土器がほとんど発見されていない。この事実は弥生式文化の末期の姿が不明確のうちに、弥生式文化から次の文化に移っているのである。これは果して事実であろうか。前述のごとく、この地域の生活が常に発展的にのみあったとは考えない。むしろ榮枯盛衰つ

ねならずという状態であったと思われるが、その意味で両者の関係をもう少し具体的に把握してみたいのである。この点については、既出の遺物の吟味こそ必要であるかもしれない。ついでに注意したいのは、土師器が須恵器と伴出しない場所があるかどうか、それは土師器としていかなる形態をもっているかということである。一般には、須恵器を伴わない土師器の方が古いとされているからである。

② 土器の問題を最初にあげたのは、時代的秩序を考える場合には有力な基礎となるからであるつぎに問題となるのは、木柵・木製品の時代づけである。この時代決定には、前記遺物に随伴して土器・陶器が何かということと、他にいかなる遺物を伴うかということである。時代決定の基礎となるような資料を欲しいものである。今日までのところ、1片の陶器、1個の弥生式土器と一緒に発見されたという以外には不思議にもあれ程多數の木製品に伴出する遺物がはっきりと判ってない。最近、マス池を作る際に土師器に伴って一部の木製品が発見されてはいるが、木柵については、はなはだ不明確である。おそらく、今後の調査では、この木柵・木製品にいかなるものが伴出して発見されるか確かめることこそ最も重要である。

③ この地域で発見される土器のうちで最古のものは、縄文式末期頃のものであることは再三述べた。この縄文式土器を使用していた人達の生活は、はたして狩猟や漁労によってのみ支えられていたものであろうか。あるいは既に農耕にも一部依存するようになっていたのではなかろうか。縄文式土器使用者がこのような低地に关心をもつようになったことは、少なくとも上ののような疑問をもたしめる。櫛の現物ないしは櫛痕をもった土器片あるいは農具などの発見はないものであろうか。

④ 弥生式土器をもつようになった人達もなお石器を使用していた。既にいろいろの石器が発見されているが、肝心の収穫具としての石包丁の発見がない。また、彼らも農耕の外に狩猟や漁労にも依存していたに違いないが、それらの具体的な証拠に欠けている。石鎌があってもよいし、木製の弓があってもよい。土器にしても煮、寝の他に米を蒸す瓶が未だ発見されていない。この時代には金属器もあったはずだが、そのような遺物が残っていない。なお、重要なことは、いろいろの木製品が発見されながら、登呂その他の地域で発見されている、いわゆる弥生式文化所産にふさわしい木製品は1つとして発見されていない。臼・杵・鋤・鍬なども発見されてもよさそうだ。木製の容器や道具類なども出て来てもよいと思う。もちろん、このような遺物の全てが発見されるとは限らない。しかし、普通の発掘とは違って遺跡全体がほとんどひっくり返されるような工事であってみれば、何か出ないものかとつい欲張って考えて見る。この地域が各時代にわたって常に居住地帯としてあったか否か不明であるし、断続的にでもかなり長時間にわたって生活に多少の関係をもっているために遺跡そのものはかなり攢乱されていて、思うような遺物がうまく保存されているとは限らない。したがって最後に、今後の調査によって遺物の上で質的に増加すれば、むしろ拾いもので最初に述べたごとく、木柵・木製品の時代づけができたら最も大きな収穫といわねばならない。

昭和29年9月16日

追記 この遺跡の性格的追求は、その遺跡自体の内容を把握すると共にそれは、周囲の諸遺跡との関連においてなきていかなければならぬ。その点、時間もかかり、時に混迷におちいることもあると思われるが、1つの課題として扱って戴ければ伊那谷に於ける農村社会発生の基本的解答の1つ“天竜川沿岸の生活”がえられるものと考える。なお、遺跡出土の遺物についての処理の問題もあるが、これは追って述べてみたい。

4. 箕輪遺跡の内容について

小池修兵

(1) はしがき

箕輪遺跡の土地改良はその一部を除いて本年6月をもって完了し、出土物もこれでひとまず、その収集を終った訳である。以後残された問題は緻密なる調査と研究であるが、これについては主として藤沢宗平先生がこれに当つて下さるので、その研究が進められるに従つて発表させてもらいたいと考えています。何にしても、この遺跡の調査、研究は長い時日の要することと思われる。この中間報告も前回同様出土品の現状を報告して、一般の参考と将来の研究に資するものである。

(2) 出土物

縄文土器

第1回の中間報告に「弥生初期」のものとして、記載した土器は藤沢宗平先生の調査によつて縄文晩期であるとのことである。この土器は、木下の穴田、渋田、久保下等の電車の軌道寄りの、廣食土の2m程ある深さの地帶葛の層から出土し、やや黒色を帯び薄手で、紋様としては口縁部近くに、横線2、3条を施したにすぎず、ほとんど無文といえる。この土器を使用したものは、おそらくこの遺跡地域に初めて足を入れた者であろうが、この遺跡の東部山麓及西部段丘には多数の縄文式土器と堅穴住居址が残されて居り、又その当時既に農耕を開始されたかどうかは不明である。この遺跡から出土の弥生式土器には底部に糸のあとと残っているものがあるが、この縄文晩期の土器には、まだ糸のあとのあるものは発見されていない。

鍾

土鍾が2個大清水から出土した。相當にまだ埋蔵されているであろうが、発掘が浅いのでわずか2個の出土である。それにしても4~5kmにわたつて天竜川沿い、しかも沼沢の多いこの遺跡に鍾の少ないのは川添に沼澤はあっても魚類豊富で、その上魚獲が容易なため、それ程鍾を必要とする漁具を使用しなかつたのではないだろうか。最近でも天竜川の各所にダムのできる以前は、この附近魚類は實に多く、何の用具ももちいずに子供でも夕食の膳すことができた。我々の子供の頃は水田でも1年に4、5貫の魚を得られた。まして上古、天竜川の河巾広く至る所に入江や沼をつくり、この遺跡地内また沼沢多くいかに魚類が豊富であったかが想像できる。

土製紡錘車

小清水の町田橋寄りから弥生・土師・須恵（次掲の灰釉を含む）と共に土製紡錘車（一部を欠く）が1箇出土した。

灰釉

灰釉のはっきりしたもの（一部を欠く）が小清水の天竜川寄りから出土した。附近から弥生土師・須恵・陶器等が多く出土する。土製紡錘車の出土した地域である。

陶器

陶器は時代がはるかに下るので、完全なものはない。破片が全地区から出土するが、やはり

住居地帯である。馬場・小清水東部・曾根田・久保下（の内石原田）・御室田とその附近から多く出土する。陶器にも様々の型式があって今後の研究を要する。

木 橋

木橋は本年6月土地改良完了の際の調査によると別表第1表の通りで総長4.375mにわたって構築されており、その大部が灌漑用水路の片側の通路にした時の下にあるが、内945mの間は水路の両側に築かれている。

木橋の巾は、普通50cm乃至70cmくらいであるが、久保下の橋詰にあったものは、1.4mの中に築いてあった。木橋の杭は、（先端を鋭く削ってあるが、仔細にみると、一本の杭の先端を削るに刃物を使用した回数は、12、3回乃至30回に及んでいます。橋の生木を削ったものであれば、今日の利器をもってすれば、精々数回の使用で事足りるのであるが、多きは、30回も削って仕上げたことをみれば、極めて純い切れ味の利器であったことが知れる。

先端が鋭く削りきれない杭もあって、この先端をみると原本を横に切るのに鋸を使用せず「ちような」様のもので切ったようである。多くの杭がその大部、節1つない極目の立派な木を使用してあることは、今日のような利器のない時代にあって、簡単に割り得る機種を選んだことと橋の原木が豊富であったことを裏書きする。

御室田出土の木橋の杭は、17mの間で1,000本を数える。全遺跡地内の木橋4,375mから出た杭は、御室田の例からすると約257,000本になる。この外まだ発見できなかった木橋もあるうし、一般水田の下から様々の形で出土した杭も多いのでこの遺跡に埋蔵されていた杭の数は実に驚くべき数字である。

動物の骨 久保下の石原田から1片出土した。

田下駄 その後、御室田その他からいくつも出土した。

下駄 下駄も9個出土しているが形も様々のものがある。普通の下駄としては古いようだが時代の判定はつきかねる。

木器・竹器・木片 各地区から日常の用具と思われる。様々な木器・木片が出土した。木串も各地区から出土する。しかし馬場東、大清水のような完形品は少ない。小清水から竹器も出土した。

たい松 各地区から燃え残りのたい松が出土する。これは松の根を細かく削ったもので先が燃えている。沼地であったような所に多い古代家庭内の照明や魚とりに使用したものであろうか。

参考 明治初年頃迄は当地では、松が油と共に大切な照明材料であって、農家では欠かすことができなかつた。とくに夜業は専らたい松のあかりに依存した恐らく古代から使われてきたものと思われる。

また夜間たい松を利用して魚とりがいまでも行われている。これを「火追い」と云う。5、6月の頃、魚の産卵期にはすべての魚が産卵のため浅瀬を求めて水田迄も遡上する所以たい松に火を灯し、その明りによって魚をさがし「もり」で突き、または手でつかむのである。たい松によるのはその明りも強く少々の雨も

風も意に介しないからである。

天竜川出水の夜など魚は渦まない清水を求めて浅瀬に遡上するので、湧水を水源とするこの遺跡ではこの「火追い」が盛に行われ、そのたぐい松が残ったものと思われる今でも5、6月の大雨によって天竜川増水の夜など10数組の火追いが見られそのかがり火は壯觀である。こんな原始的の漁法で子供でも一夜に鰐一貫乃至位の獲物があることもある。

刻銘の石

高さ27cm 幅15m

本年6月曾根田から人物と文字を刻った石が出土した。彫刻も絵画も幼稚であり、文意も判断しかねる。彫りもヤゲン彫りにて新しい感じがするのである。字は「天王上田城門」又は「天王也田城門」等と読める。全然戯作とも思えないが、さてその文意が明らかでない。ただ文字の上から城に関係したものであろうと思われる。その城も田中城か福与城か、木下箕輪城か（この城址の北つづき天王という地名あり）久保の棚木城かわからぬ。当分謎の石である。参考のためにその出土地と附近城址との距離を調べると次のとおりである。

出土地 曾根田の向山紋吉氏水田より

田中城まで南 約400m

福与城まで東 約400m

木下箕輪城まで西北 約380m

棚木城まで西 約350m

(3) 耕土中の砂利（砾層）

この遺跡の水田中には50cmから1m位の所に10cmから15cmくらいの砂利又は砾の層のあるところが多い。この断面をみると、その砂利又は砾層は時々の水害がもたらしたものではないかとの疑問も起る訳であるが、それは水害によるばかりで無く人為的のものも多いようである。この遺跡中の水田は、膝を没する程の深い沼田であって、水田作業に著しく困難であるため、木材、粗柴、松葉等を踏み込んで足の陥没を防ぐことに骨を折ったのであるが、恒久策として砂利や砾を入れることが近年実行された。これは乾田の地上げと異なり、沼田の中に砂利を入れるだけで、その砂利や砾は適当な場所に沈下して、それ以下に足の陥没することがなくなるのである。このようにして入れた、耕土中の砂利や砾は水流のもたらした砂利や砾層の如く美しくなく、泥に混じっているから汚い。この遺跡の底地部分に見られる耕土中の砂利層は多くこれである。従って、その砂利層やその下の耕土中から土器やその他と遺物が出土し得るわけである。御室田、城、曾根田、久保下等からは、この砂利層の中やその下から多量に土器が出る。但し曾根田の一部には洪水の為によると思われる砂利層も見受けられる。天竜川に近いからであろうか。御室田の一部では沼田中に砂利を入れる際、土器を多量に含む場所から砂利をとって入れたらしく、その砂利層の中から泥土にまみれた、小さな土器破片がたくさん出土した。苦谷、馬場、大清水地籍の耕土中の砂利層は、ほとんど蒂無川の氾濫によるものらしい。

(4) 住居址

この遺跡から住居址がまだ発見されない。馬場、御室田などからは炉のあとが出、曾根田からは20mぐらいの石を平に2m角程に敷きつめた所等が出たが、住居址と認定されるものがない。上の比較的深い場所にあっては、それ迄掘り得なかったことと、土の浅い場所に在っては地表から20cmないし40cm下は砂利層であるため植穴等は残らないものと思われる。また藤澤先生のいわれるよう、その頃地上住居もあったであろうが、それらは古い時代における開田の際、始末されてしまったものであろうか。しかし炉のあと、焚火のあとがいくつかあり、炭や灰のおびただしく混じた土層があるのをみても、多量の土器、用具類の出土からみても、馬場、御室田、久保下、曾根田と小清水の東端、大清水等は住居地帯であったと思われる。馬場は遺跡内では最も高燥の地であり小清水の住居址地帯と思われる所も周囲より30cmから40cm高く俗に検見塚と称されてきた程の比較的乾燥した地で耕土も15cmから40cmである。曾根田は名のように大きな曾根をなしている所であり平均20cm位高く沼田ではあっても、乾く方で耕土も15cmから40cmである。御室田も附近より30cmから40cm高く耕土は15cmから40cmで沼田であるが乾く方である。久保下は周囲より約20cm高いだけであるが、それでも広い久保のうちでは乾く方であろうか。住居地としては最も条件が悪いかと思われる。大清水は馬場の東方に連なり、帯無川押出の突端にありて約1m位の段丘の上である。然して、この地からは小さな木器や柄の実の皮がたくさん出土しているのである。このように見ると住居址と思われる地区は何れも周囲より高く、比較的乾く地であること、耕土が比較的浅く、砂利層が高いことの条件が共通している。これらの住居地帯がいつ頃開田されたものであろうか。それは推定に困難であるが、その住民が附近の村落即ち今の木下、久保、三日町等へ移住してしまった時期ではないかそれらの地帯から陶器も相当量出土するところを見れば鎌倉、室町頃迄一部の人達が残って居たかとも思わせる。御室田は、天正11年の木曾氏の文書に依れば、田になっていたので開田はそれ以前である。久保下からは、同一場所から5個の弥生式土器が下約4分の1が揃って出土した所がある。上の4分の3は開田の際失われたものであろう。もちろん附近から、弥生、土師の破片が多量に出土したし、陶器も多かった。御室田からは炉に使用した石をはじめ、礎石、叩き石、その他いろいろに使用したと思われる石が沢山出ている。

(5) 歴史及び神社との関係

歴史との関係については、次のような事柄が考えられる。諏訪神社の伊那回り湛の神事が、この附近では塩の井で行われているが、塩の井のどこで行われたものであろうか。塩の井で行われたという湛の神事について一つの新しい疑問がわいてくる。遺跡中祭器が特に多く出土し且つ後世木曾氏によって神社に寄進され、神事に特別に関係あると思われる御室田（三室田）は塩の井を距すこと僅々200mにすぎない。また諏訪神家の日記には、湛の神事の一行が久保に泊ったことを記載している。この塩の井なり、久保なりの湛神事と、その近距離にある御室田との神事について関係があったのではないか、あるいは事実は御室田で行われたものか、塩の井で行われたことになっていたのではなかろうか等の疑問も起きる。御室田は現在三日町地籍である。三日町の名称がいつ頃からのものか、わからないが、この名前は市（イチ）が始められてから、できた村名と考えられるので、その以前に呼称があった筈である。その旧来の名前がどういう呼称

であったかわからないが、御室田で行われたものが塩の井として記録されることもあると思われる。御室田は南箕輪村の塩の井と境を接しており、三日町と塩の井（その他もあるが）の耕作者が相互に入作出作をしている。御室田の土地の区割は古代の形を残し、研究に値すると一志茂樹先生は述べている。木下に鎮座する箕輪南宮神社の秋宮が現に三日町にあり、従って木下の神社は春宮である。神体は、この両社を春秋交互に遷座する。すなわち、7月木下で夏祭りを終えて神体を神輿によって前後駒馬の神官や村役人が護り奉納の稚児行列が従って、三日町の秋宮に遷座する。9月に三日町の産土神である御射山三社の祭典には、御府（又は神府、御室ともいう）社の神体と共に、神輿によって神宮、村役人、守護と村内一巡した後、三日町の内、上棚の山麓に設けられる仮宮に遷して祭典を執行する。即ち箕輪南宮神社の神体がこの時は、三射三社の神体となる。これを穂屋の御狩の神事と呼ぶが、祭典が終わって神体は夫々の宮即ち神府社と秋宮に戻るのである。12月27日夜の丑の刻に、この秋宮の神体は「お神渡り」と称え神官二人が白い東にてひそかに秋宮から春宮に遷すのである。この時のお神渡りは他に見られてはならないとされ、又これを見たものは、災厄に逢うとして、その夜近郷は、一段と早寝をするを例としている。翌12月28日は祭典を執行するが、暮の市として賑やかである。翌年は1月になると10日夜から11日にかけて初祭りとして賑やかに執行されるのである。7月の夏祭りは木下の春宮にて行われ、奉納する稚児は天竜川東と西にて隔年に出るのであるが、西は富田、大萱、大泉にて東は福与、福島からであって稚児には鹿頭を冠し、父兄が持帯刀にて附添、村役人と附いて太鼓のばちさばき鮮やかに行列をつくって奉仕するのである。この様に箕輪遺跡を中心として東西にわたって、神事について古来特別な関係を有するのは何れも、上古からの慣例でその頃の名残を伝えるものと考えられる。箕輪南宮神社の祭典は健御方命である。木下の「暮の市」「初山」は夏祭りと共に近郷の参詣者にて賑やかであるが、この市はその先は三日町の市ではなかったか、あるいは箕輪南宮神社と御射山三社（神府社）はもと同一の社ではなかったか。更にその祭祀は御室田に關係あったのではないかと疑問を生ずる訳である。祭祀若しくは祝いに用いたと思われる木串の多量に出土する大清水は、前記春宮と秋宮のほぼ中間でしかも、神体遷座の道筋である。これも何等かの関連があるか参考のため附記しておく。

(6) 遺跡の水田地帯としての価値

100町歩に余るこの地の水田は、古来この地の支配者にとって得難い穀倉であったに違いない。古くは松島王墓に眠る貴人も、小河内上の平に居た知久氏も共にこの地に大きな望みをかけていたであろう。さればこと、今日の金にして推定7、8百万円を要する杭をもって大規模な木柵を築き得たのである。藤沢行親が建武の功に依り箕輪を領して赴任に際し、福与城を選んだのは、岩崎長思先生も述べていられるように、その天険もさることながら、眼下に見る穀倉地帯を戦力資源としての理由からであったと思われる。武田信玄が天文20年に下那郡出兵の際、社である三齊社（御射山社）に土地を寄進したのは、この地の住民を懷柔してその産米を得る理由からであったろうし、天正11年木曾義昌が三日町、福与の両神社に土地を寄進したのも武田氏同様の理由であったと思われる。慶長6年に小笠原秀政が田中城に陣屋を置いたのも同様であったと考えられる。この遺跡の大部分の耕作者は三日町、木下、久保、塩の井で殿村であるが、これらの

村が幕領となつたのは産米政策の現われではなかろうか。宝永3年三日町の内30石を諫諭貞松院
朱印地として附けられたのであるま、これも産米地の故ではなかろうか。

(7) 地名

慶安2年検地の際の箕輪遺跡内三日町村の地名をひろってみると次のようである。このうち、一部は残っているが大部分は土地台帳からも、伝承からも失われている。

ひげた 城の田 城北 なわて田(綱田) 城南 そとばり 広そぶ 城西
そとばり入口 そぶ田 左工門田 堀の外 ふう田 そぶの井口 南城
市右衛門田 城根 堀田 城こし とび長 大なわぞい あわら すがた
八反田 熊川 四つおさ みやうさ田 みざる田 みつをき そね田 かさ田
大なわぞい ふか田 かさ田屋東 うつぎ田 久保なわて いざる田
かけらけ免 かも田のそぶ 宮田 大堀田 人足田 新右衛門田 大けんじ
かも田大なわ 穴田 善九田 石原田 かも田 木戸口 古川 ひろ田
なすび田 大式而うし 欠田 新田 志かい 川原与市島 井東 欠田川原
小三郎田 いぬの川(犬の川) 清水田 町田 卯之木田 水口 古町
中かわら(中川原) どぶの裏 古河ばた

次に寛永16年の木下検地帳から地名をひろってみる。このうちには西の段丘の中段の地名も混じっている。

川原 かまつば まないた ひえもち 小清水 堀田 かな山 大なわそへ
かりまた田 のほりはじ 齋なわて へご田 まめ田 そぶ田 いし原田
あな田 畑田 武つおさ 大橋 ふつとで 犬の川 山川堀 たかをな
きつね作 とひおき 山ぶし塚 そぶ はしづめ みそかえ ●みのわ坂
●上ノだん ほら口 ●つつみ (注) ●は段丘上と思われる。

この慶安の検地帳には城安寺、高坂田、御室田がない。当時城安寺、高坂田は天竜川敷であったかも知れないが御室田は慶安、寛文の両検地帳にない。天正11年に字名があつて、この時になつてないのは宮田と呼んでいるのがそれか、又は後の洪水に大荒れになったとも思われる。前記地名のうちに「かさ田屋東」という地名がある。かさ田とは今の御室田のすぐ東隣である。ここに屋東の地名の残ることは、御室田附近には比較的後まで人家があつて、それが洪水に流されて一時退転して又旧地を開いて旧名を呼んで今日にその名が残つたとも考えられる。

(8) 水防施設

遺跡の東、曾根田から御室田の間約100mにわたって県営排水工事のため掘削した際、合掌、沈床、聖牛など立派な水防施設がそのまま出土した。これらは多く江戸時代の中期以降のものであるが、慶長の三日町の水害以来この遺跡地の水田を守るために多くの努力が払われたかがうかがわれる。天竜川はその頃まだ河床が低かったのが順次高くなつたものと見えて、これら水防施設はその頂点が遺跡地の田面より1mも低い。古来この地方の穀倉ともいえるこの地籍の水防には、大きな努力が払われたことであろう。藤沢氏が水防に骨を折つたことも語り伝えられている。武田氏が川除普請奉行某を三日町に駐在させたとも言われている。慶長17年の洪水は青天

の隕石であり、多分城安寺の一角から流入したものと思われる。城安寺といえば、この地方の水防の赤信号の代名詞にまでなっている。年々歳々ことに昭和20年、25年、27年の各水害にこの城安寺堤防の防備は、箕輪村はもちろん、南箕輪村も村を挙げて最も真剣であった。慶長の洪水を考えるまでもなく、今もこの城安寺堤防から洪水の流入を許したならば遠く北殿駅迄の数十町歩がひとたまりもなく押し流されてしまうのである。遺跡地東端を南北に流れる川を古川と呼んでいる。これは天竜川がもと通ったあの川という意である。「古川に水絶えず」という諺は、この地方では「1度天竜川が通った所はいつか再び天竜川が侵入することがある」と注意せよと警報に使われている。

参考 箕輪村地籍の天竜川には国有の川敷がない。天竜川の河川敷全部が個人所有地である。

古来天竜川が移動の都度、そのあとを開田してきたもので、現在川敷でも何れの日か又水田のできる時が来るということで、国有地にしなかったのであろう、一面古來その汎濫のはなはだしかったことが想像できる。しかしその汎濫が三日町だけであって、それ以西にはあまり及ばなかったのではないか。

(9) 経過

第1回中間報告後のこの遺跡調査についての経過は次のようにある。

- 昭29・5・13 上伊部教育事務所中尾猛夫氏に依りこの遺跡関係のスライド完成。箕輪小学校にて上映。
同 藤澤宗平氏「農業信州」6月号に「箕輪遺跡にみる農耕文化」を発表。
〃 5・30 岩崎長思氏より「箕輪遺跡をみて考う」を送られた。
〃 6・29 慶大教授松本信広博士、同清水潤三博士が視察せられ、木製品について調査された。
昭29・7・2 藤澤宗平氏が調査に来られ7月4日迄続行される。
〃 7・4 国学院大学教授大場盤雄博士、信濃史料の一志茂樹氏が遺跡及び遺物の調査をせられる。
都文化財保護調査委員北村勝雄氏、北原真人氏、友野良一氏等調査に来られた。
南安三郷村猿田文紀氏、北安大町市平小学校長宮下豪夫氏等調査に来られた。
弥生ヶ丘高校白鳥伝氏及生徒数名調査せられる。
〃 7・20 東京に於いて調査の為土器を藤澤宗平氏のもとへ送る。
〃 8・10 遺跡地大清水に鉛池の工事をなしおり橋の実を多數掘り出す。
〃 9・8 前記の所より50cm程南にて木下駅より町田橋方面に行く道沿の1m80cm位の下の砂利層に打ち込んだ乱杭多數出る。栗材の集団あり、檜材の集団ありである。

⑩ 地勢概観

駒ヶ岳山塊と、守屋山の山系との間にあるこの箕輪地籍は、中央を天竜川が貫流して、西方から桑沢川、深沢川、帶無川、大泉川が流れ入りて、東方からは田無川、戸沢、曲尾沢、宮沢、玄簡沢、鎌倉沢、判の木沢、吉田ヶ沢、瀬沢川が流れ入りて、天竜川は西に東にもまれている。この内最も大きい押出は帶無川にて、次は大泉川、深沢川で大きな扇状地をなしている。

扇状地に、しかも段丘になっている端に繩文遺跡がある。木下上の林、南城、蘿塚等はこれである。これらの住居は、押出の扇状地の、表面を川が流れているのではないか。その後になって水は覆流になって、住居は段丘下の、泉の出るほとりへ移ったものであると思われる。

帶無川はその後洪水となって、中原東方から下流へ押出したもので、木下北部、松島南部はこの押出しの上にある住居地帯で、土器その他遺物の出ないとは、その為であると思われる。

天竜川は両岸より流入する川によって、あちこちにもまれて蛇行していたものである。現在東箕輪村と箕輪村の境にある沼地は、四方桑沢川や深沢川の流れ先にて天竜川は東に追われ、久保と木下の間、段丘の下にある沼地は、東の鎌倉沢の押出しに追われたものではないだろうか、この他小さな川の流入先によりて、天竜川の蛇行は少しづつ変化したので、有機層と礫層が、上になり又下になり繩文になつたりしたのが、この南箕輪村、箕輪村、中箕輪町に跨る沖積地を造り、第2次の帶無川の洪水にも逢わないのが此の遺跡である。

⑪ 遺跡地概説

箕輪遺跡は、天竜川西沿岸の箕輪村、中箕輪町、南箕輪村の3ヶ町村に跨る、総面積80町歩にわたる広範囲の地域である。(現在発掘中は70町歩)

古来一般には、この地域が天竜川東沿岸の平坦地と同じく、常に天竜川が荒れるにまかせていた地であると考えて、遺跡地としては顧みられなかつたが、我々は後に述べる歴史との関係や、最近の天竜川流域平坦地との高低の差が1mから1m50cmあること等からそれを然らずとし、また大正の初年、田中城址附近からと、昭和11年字小清水から夫々打製石斧各1個を発見した事実から、遺跡地としての希望を捨てなかつた。

たまたま昭和26年に、伊那町以北の2町3ヶ村で伊那土地改良区が設立され、大規模な土地改良(耕地整理)が行われることになり、天竜川西沿岸では、まず苦谷、馬場、城安寺、北殿の各地区を行つたが、その際馬場地区からは多量の弥生、土師、須恵器と共に、十数ヶの戸のあとが発見され、苦谷からは土師、須恵器が出上したので、これに続く直ぐその南方の全地域も、弥生以降の遺跡、特に農耕遺跡であろう事が想像され、観察その探査につとめたのである。

果して昭和27年2月から3月にかけて、城安寺地区において石臼、木櫛、弥生式土器が発見され、遺跡であることが認められるに至つた。

特にこの遺跡が、弥生以降現代に至るまでの、各時代を通じての遺物が出土し、歴史との関連をもつ集落及び農耕遺跡であつて、土器、石器のほか、木製品及び食物の残りかすがおびただしく出土することに重要な意義をもつ。

もし仮に、全面発掘を行つたらば、その埋蔵されている遺物は、予想できない程大量であろう。県文化財調査委員藤沢宗平氏も、「極めて重要な遺跡である」と述べられている。又惜しむら

くは、土地改良が本年5月中までに完了すべき水田であり、工事を急ぐので調査も意にまかせず且つ現場を保存する施設もできない。

02 篠塙遺跡の特異な事項

釜塙 この地域には所々に釜塙がある。この釜塙と称するのは、常に水がわき出して水田にならず、始末が悪いので、そのわき水の場所だけあぜをつくって取り巻き、水のわき出すままにまかせておくところである。

沼地 古来からの凹地でわき水もあり、泥深く、水田にならない沼である。現在は少ないが、明治の初年までは幾つかあったことが、古図の上でも判明している。現在の小さな田は、もとほとんどがその泥沼であった。

アシ 上古この地は、一面アシの密生した沼地が多かったらしく、特に木下、久保、塩の井に近い沼田には、約40cmの耕土の下に、約20cmから60cmのアシばかりの層が延々とそのまま残っている。

沼田 この地域の大半は沼田である。即ち常に水を湛え、耕土深く水田の作業に著しく不便である。徳川時代、曾根田、城、御室田あたりは上田であったが、それでも湿地である。木下久保、塩の井に近い地区にいたっては、ほとんど沼田で、田打ち、田植、田草とりにもあまり深く落ち込むので、腰をよく曲げないで済む田さえある。下田である。

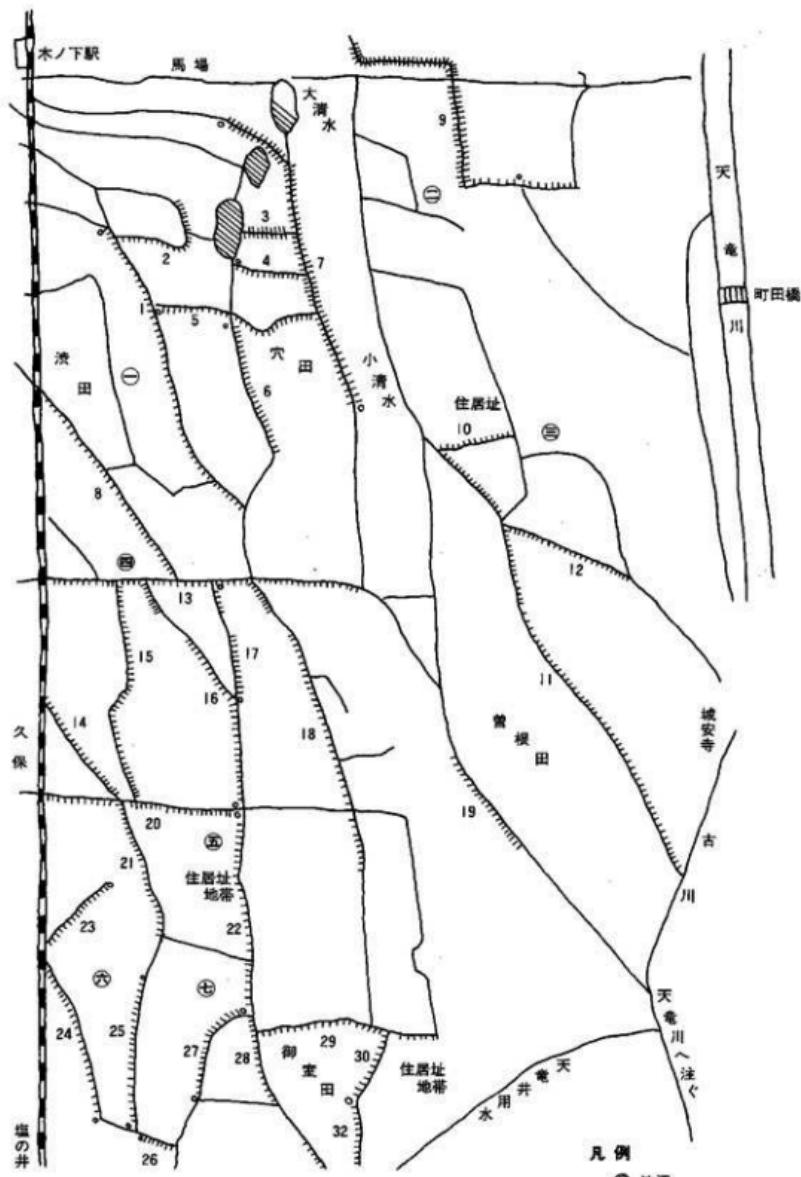
ことに収穫作業には不便を感じ、粗朶（そだ）、田舟などで刈り取った稻を、あぜまで運ぶことが大正の末頃まで行われた。これらの田はもちろん牛馬を入れることができない。

またわき水が多く、その上冷水をかんがいするので冷害が多く、天竜川の水をかんがいする田のように、いわゆる「かけ流し」ができる。朝夕水見をして、冷害を防がなくてはならない。近時メタンガスが発生して、農家の苦労は大変なものである。

深い耕土 相当広い範囲にわたって、2m以上の耕土を有する場所が何ヶ所かある。

わき水 木下、久保等の段丘のそそにはわき水が多く、とくに木下の南部及び苦谷、泉沢からは極めて豊富な水が、こんこんとわき出して全遺跡地を潤している。また釜塙にも清水の噴出量が多い。

地名 一般に地名は単純で広い区域が同一地名（字名）になっているが、この遺跡地内の字名は極めて多い。慶安の検地帳をみると、遺跡地内の篠塙村の区域だけでも50に近い地名がつけられていて、古くから住居地または水田として、人との交渉が他の地籍より深かつたことを物語っている。南篠塙村の区域には、今なお30位の地名が残っており、木下にはこの遺跡の西部に、后（きさき）、后洞（きさきぼら）、鳳籬路（ほうれんじ）、天王（てんのう）、猿樂（さるがく）というような地名が残っている。



第12図 木場出土土地帶図

凡例



池沼



水路

第Ⅰ表 木橋調査表

| 集団 | 木橋所在番号 | 所在地名 | 水 源 | 接続 | 延長(m) |
|------|--------|------------|---------|-------------|-------|
| 第1集団 | 1 | 渋田 | 泉沢 | 木下から引く | 260 |
| | 2 | 渋田 | 泉沢 | 一号から引く | 140 |
| | 3 | 穴田 | 泉沢及び蓋盛 | 二号から引く | 25 |
| | 4 | 穴田 | 泉沢及び蓋盛 | 2号から引く | 55 |
| | 5 | 渋田一穴田 | 泉沢及び蓋盛 | 高台1号から引く | 110 |
| | 6 | 渋田 | 泉沢及び蓋盛 | 高台5号から引く | 140 |
| | 7 | 大清水一穴田一小清水 | 泉沢及び蓋盛 | 木下から引く | 300 |
| | 8 | 渋田 | 泉沢 | 木下から引く | 190 |
| | 計 | | | | 1,220 |
| 第2集団 | 9 | 大清水一小清水 | 泉沢 | 鶴池から引き天竜に注ぐ | 265 |
| | 計 | | | | 265 |
| 第3集団 | 10 | 小清水 | 泉沢 | 鶴から | 10 |
| | 11 | 小清水一曾根田 | 泉沢 | 鶴から | 390 |
| | 12 | 小清水 | 泉沢 | 11号から続く | 40 |
| | 計 | | | | 440 |
| 第4集団 | 13 | 久保下 | 木下西南部湧水 | 13号から分れ | 120 |
| | 14 | 久保下 | 木下西南部湧水 | 13号から分れ | 50 |
| | 15 | 久保下 | 木下西南部湧水 | 13号から分れ | 220 |
| | 16 | 久保下 | 木下西南部湧水 | 13号から分れ | 230 |
| | 17 | 久保下 | 木下西南部湧水 | 13号から分れ | 80 |
| | 18 | 久保下 | 木下西南部湧水 | 13号から分れ | 290 |
| | 19 | 曾根田 | 木下西南部湧水 | 13号から分れ | 70 |
| | 計 | | | | 1,060 |
| | 20 | 久保下 | 久保部落湧水 | 久保から | 140 |
| 第5集団 | 21 | 久保下 | 久保部落湧水 | 2号から | 150 |
| | 22 | 久保下 | 久保木下の湧水 | 16号から | 270 |
| | 計 | | | | 560 |
| | 23 | 久保下南 | 久保部落湧水 | 軌道西から | 20 |
| 第6集団 | 24 | 久保下南 | 久保部落湧水 | 軌道西から | 60 |
| | 25 | 久保下南 | 久保部落湧水 | 21号から | 100 |
| | 26 | 久保下南 | 久保部落湧水 | 24、25号から分れ | 50 |
| | 計 | | | | 230 |
| 第7集団 | 27 | 久保下南 | 久保木下の湧水 | 22号から | 90 |
| | 28 | 御室田 | 久保木下の湧水 | 22号から | 90 |
| | 29 | 御室田 | 久保木下の湧水 | 22号から | 140 |
| | 30 | 御室田 | 久保木下の湧水 | 28号から | 80 |
| | 31 | 御室田 | 久保木下の湧水 | 26、27号から | 50 |
| | 32 | 御室田 | 久保木下の湧水 | 29号から | 150 |
| | 計 | | | | 600 |
| | 総計 | | | | 4,375 |

箕輪遺跡

調査第Ⅰ集

小清水・大清水

昭和56年3月31日 印刷

昭和56年3月31日 発行

発行所 長野県箕輪町教育委員会

印刷所 伊那市 小松総合印刷㈱